
図書館戦争・短編集

山子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書館戦争・短編集

【Nコード】

N1178V

【作者名】

山子

【あらすじ】

『図書館戦争』の二次創作です。

かなり前に、ブログサイトに載せていた作品です。

堂上x郁

注：拙過ぎる文章です。

傷跡（前書き）

初SSです。

時期は、図書館戦争あたり。
堂上x郁です。

傷跡

「笠原、ここどうした？」

まだまだ不慣れな館内業務も終わり、日報を書いていた郁に堂上は自分のコメカミ付近をトントンと叩いて見せた。

「はい？」

「ここ。なんか赤くなってるじゃないか？」

「え？」

堂上の言葉に近くにいた小牧が郁を覗き込む。

「本当だ。笠原さん、ちよつと擦り傷になってるよ」

「ええー！！ホントですか！！」

郁は引き出しを開け、可愛らしいポーチを取り出した。

いくら自分で戦闘職種大女と言っているが、こういう所は実に女の子らしい。

ポーチから二つ折りの手鏡を取り出すと、位置を調節して確かめる。

確かにそこは、少しだけ擦り傷があった。

「わぁ、本当だあ」

郁は、ちよんちよんと擦り傷を触りバツの悪い顔をした。

その顔に気付かない堂上ではない。

「で、どうした」

「今日は、図書館業務だったし、何もトラブルはなかったよね？」

上官2人にジツと見つめられ少々居心地が悪い。

だが、郁としては言いたくない事柄らしく思案顔で瞳[×]を泳がした。その郁の態度に堂上の眉間の皺が深くなる。

「上官への報告は義務だぞ」

腕を組んで、堂上は威圧的に座っている郁を見下ろす。

郁は、上目遣いで堂上、それに小牧を見ると、「うゝ」と唸って項垂れた。

「……実は今日、児童室で3歳ぐらいの男の子に後ろから思いつきり足に体当たりされちゃいまして、油断してた事もあってバランス崩してこけそうになったんです。男の子も巻き添えにしそうになっちゃって、それを回避しようと足掻いた結果、男の子の持っていたミニカーがガツンと……」

郁の報告を聞くなり、堂上は大きく息を吐いた。

「なんで言い淀んだ」

「ホント、別にヤバイ事柄でもないのに……」

笠原さん？と、小牧も不思議そうに首を傾げる。

グツと喉を鳴らした郁は、机に突っ伏して弱弱しく答えた。

「だって、3歳児の体当たりぐらいで戦闘職種がこけるなんて恥ずかしくて言えないですよ」

「確かに、全力で来られても3歳児くらいなら大丈夫だね？」

「それがツツ！！3歳児の身長って膝カツクンの良い位置なんですよ！！あれが後ろからじゃなくて前からだったらあツツ」

郁は、顔を羞恥に染めて叫ぶ。

その言葉に、小牧が小さく上戸に入った。

「アハハハ……笠原さん……アハハ……最高過ぎ……」

「笑わないで下さい　！だから、言いたくなかったんです」

「アホか、貴様は！」

ガツンという衝撃と共に、それは郁の頭に振ってきた。

「いったあ　ツツ。いきなり何するんですかツツ、堂上教官！！」

まだ、微妙に突っ伏していた郁は脳天と額にダブルで痛みが襲った。郁は頭と額を手で押さえつつ堂上に向き直る。

「うるさい、バカ！顔に傷なんか作って何事かと思うだろうが！」

「だって」

「だってじゃない」

「堂上は心配したんだよねー？」

そこに、笑いを含んだ小牧がすかさずつつこむ。

「小牧！ツツちが！」

「あれえ、俺は上官として心配したよ」

更に、絶妙なツツコミが入り、バツの悪くなった堂上は郁から目線を外し、自分のデスクに向き直った。

郁は、堂上から背を向けられ、自分が隠したいがために上官への報告を滞り、なかった事にしようとした自分に自己嫌悪した。

情けない。

少し泣きたい気持ちになったが、ここで泣くのは卑怯だと思い郁は顔を伏せ耐える。

何とか涙が引つ込めさせた郁は、謝罪をしようと顔を上げようとした瞬間、ポンポンと頭に手がのせられたのに気付いた。

小さくため息が聞こえ、郁の伏した視界に膝を付く影が写った。

慌てて顔を上げようとした瞬間、堂上の声によって動きを封じ込められた。

「動くな」

堂上は、郁の髪を軽く掬い上げ、持っていたそれを慎重に郁の傷にあてがう。

「ったく。女が顔に傷なんかつけるな、跡が残ったらどうする」

「バンソーコー？」

「即席だ。何もせんよりは良いだろう。寮に帰ったら、ちゃんと治療しろ」

「あ、ありがとうございます」

「それから」

バンソーコーを貼り終えた堂上は立ち上がると郁の髪をガシガシヤとかき回した。

「わわわわ」

「子供に怪我をさせなかったのは良くやった。次からは、どんな事でもちゃんと報告しろ」

「はい。すみませんでした」

素直に謝った郁に堂上は満足そうに微笑んだ。

「ねえ…仲が良いのは分かったから、そろそろ良い？早く日報もらって帰らないと晩飯食いそびれそうなんだけど」

小牧の声に弾かれたように二人は小牧を振り返った。

その顔はニヤニヤしている。

音が鳴るぐらい勢い良く郁の頭から手を離れた堂上は、薄く赤面した顔を隠すように郁から背を向け怒鳴る。

「笠原ツツ！！」

「はいッ！」

郁も弾かれたように返事を返し、途中だった日報を書き始めた。

その様子に小牧は小気味良く噴出し上戸に入った。

終

暖かい涙（前書き）

図書館危機あたり。堂郁風味？
郁ちゃんの思い出。

暖かい涙

笠原、あんたのフォーム大好きよ。

爽やかな春の朝。

植物を育てる心地よい太陽が照り始めていた。

窓から入ってくる微風そよかぜが、ヒラヒラと洗ったばかりの洗濯物を揺らし、爽やかだ。

今日、堂上班は公休である。

いつもなら、ダラダラとベッドでまどろみを楽しんでいるのだが、朝から柴崎に叩き起こされてしまい、寝るに寝れなくなってしまった。

まったく、柴崎のやつ！郁は、気持ちの良い睡眠を遠慮なしに妨害した美しき鬼に悪態ついた。

柴崎が起き出した時間は、いつもなら郁も起きる時間だが、寝坊が許される公休日だ。夢と現実の間で、頑張ってねえ、と口の中で呟く。

そして、再び深い眠りに入ろうとしていたのだが、ベッドカーテンが突如、音をたてて開け放たれ妨害された。

薄暗かった空間は一瞬にして明るくなり、郁は眉をひそめて布団をギューッと抱え込む。

あら、かわいい、と柴崎は小さく呟くと、郁の耳元にフウッと息を吹きかけた。

郁は、突然来たゾワゾワ感に飛び上がり、ベッドから滑る様に這い出した。

『おはよう。あんたさ、今日の昼、暇でしょ？基地近くにカフェが

新しく出来たのは知ってるわよね？付き合いなさいよ」

起きたのを確認した柴崎は、戦闘装備に取り掛かりながら用件を言う。

公休と分かっている、あえて昨晚、誘わず、朝になってから誘ったのは絶対にわざとのはずだ。

ピンクパールの口紅を形の良い唇に塗る。

色んな角度から、チェックを終えると、未だにボーゼンとしている郁に視線を向けて、

1300に図書館に集合、と朝から輝く笑顔で言い放った。

しっかりと起こされた為か、二度寝の睡魔は一向に襲ってこない。

郁は、起きてしまったんだしと諦めを付け、いつも寝巻き代わりにしているジャージから、薄手の淡い黄色の長袖Ｔシャツに足首がキツクとなっているゆったりとしたジーンズに着替えた。

洗濯も昨日の夜に済ませていたし、掃除も一昨日、公休だった柴崎がしてくれたとこだったので特にすることがない。

心地よい気候、爽やかな朝。

郁は、折角だしと図書館で本を借りて中庭で読書に洒落込もうと決めた。

読んでいるうちに、柴崎との一方的な待ち合わせの時間にもなるだろう。そうと決めたら早かった。

肩掛けのバッグに化粧ポーチと財布を入れて部屋を飛び出す。

開館してまもない図書館は、まだ利用者は少なく、職員の方が多いくらいだ。

郁は、とりあえず朝から叩き起こした張本人に文句を言うべく、館内をぐるりと回った。

探し人は、すぐに見付かった。

柴崎は、オススメコーナーの本を見やすい様に整頓していた。

郁は柴崎に気付かれぬよう背後から近寄り、出来るだけ低い声で柴崎の名を呼んだ。

「しゅばさき」

だが、柴崎は驚く事無く郁の方に振り返り、営業用のスマイルを向ける。

「あら、お早いこと」

「うつさーい！あれから寝れると思ってんの！」

たいしたリアクションも見れず、内心不満に思う。郁は気を取り直して柴崎が整頓する本棚を覗き込んだ。

「ま、いい。お昼まで中庭で本読んでるから、なんかオススメない？」

「オススメねえ」

柴崎は、そ～ねえ～、とぐるりと本棚に並べられた本を見回す。

すると、突然、郁と柴崎の会話に業務部の同期が割り込んできた。

「笠原、本探してんの？」

「わ！突然沸いてくるな、ビックリしたー」

「ごめん、ごめん。で、本を探してるんでしょ？」

だったら、これ！！と迷う事無く1冊の薄めの本を取り出した。

青空と雲の表紙がとてもキレイだ。

郁は、小首を傾げ表紙を見る。一方、柴崎は表紙を見るなり、なるほど…と感心したように相槌を打った。

「その本、今、人気急上昇のやつね」

「そう！しかも、これに出ている女の子が笠原にそっくりなのよ」

「へ」

「そういえば、他にも似てるって言ってるの聞いた事あるわ」

郁は、そうなの？と、同期が持っていた本を受け取り表紙をじっくりと見る。

そして、

動きが止まった。

小さく瞳を見開き、表紙を…いや、表紙に書かれた著者の名を凝視

する。

「その作家さん、確か亡くなってるのよねー」

近くにいたはずの同期の声が遠くで聞こえる。

郁だけ、時間が止まったように動かない。動けない。

それほどの衝撃だったのだ。

「笠原？」

突然、表情をなくした郁に柴崎がいぶかしんで声をかける。

その呼び声に、郁は我に返ったように顔を上げ、えへへと無理やり作ったような笑みを見せた。

「じ、じゃあ、これ借りようかな。手続きできる？」

取り繕ったような郁の態度を不振に思いつつ、柴崎は手続きをするためにカウンターへと足を向けた。

本を借りた郁は、中庭のベンチに腰掛けていた。

そして、手には借りたばかりの本が1冊握られている。

ゴクリ、と喉を鳴らし、数回深呼吸をした後、表紙を開いた。

私の中で、あいつとの出会いは本当に特別だった。

そんなフレーズから始まっていた。

郁は慎重に、一文字も読み飛ばさぬように読み始めた。
どんなに時間が経っただろう。

数分だろうか、数時間だろうか。
読み進めていくうちに郁の頭がどんどん伏されていく。そのうち、
鼻を吸る音が聞こえ始め、ついには、噛み殺した様な鳴咽が漏れ出した。

視界が歪み文字がぼやける。その度に、瞳^めを擦る。

だが、涙は止まる事を知らないように流れ続けた。郁は、等々、読むのを止めてベンチの上で膝を抱えて顔をジーンズに押し付けた。
押し付けられたジーンズに涙の後が広がる。

「ふ・・・う」

知らなかった。知ろうと思えば知りえた事なのかもしれない。
こんなのも、こんなにも、あの人は温かいのに。優しいのに。こんなにも想ってくれているのに…

自己嫌悪と後悔が郁を襲う。

「なにを泣いている？」

唐突に頭上から聞こえてきた声に顔を上げた。

その郁の顔は涙と涙を止めるために擦った手によって、グチャグチャになっている。

「きょ…官？」

そこには、特殊部隊の制服に身を包んだ堂上が立っていた。

堂上は、ヒドイ状態の郁に顔を歪める。

泣く理由を強く問質したいのを我慢し、つとめて平静な声で問う。

「で、お前は、公休の真昼間から何を泣いてんだ？」

「教官こそ、制服・・・」

郁は、堂上の質問に答えず、自分と同じく公休のはずの上官に疑問をぶつけた。

その言葉に、一瞬、眉間に皺を作った堂上だったが、次には、大き

く息を吐き出した。

「俺はな、あの隊長の丸投げ書類の処理」

で、お前は？と、堂上は今度は郁を促した。郁は、上げていた顔を再び伏せ、ポツリポツリと話し始めた。

「この本、読んでたんです」

郁は持っていた本を堂上に差し出した。

「これ…この本…」

話そうとしたが、再び、嗚咽がきて声が途切れる。

堂上は黙って、ハンカチを取り出し郁に差し出す。郁は、少し躊躇したが、ありがたく受け取ると消え入るような声で礼を言い涙を押し付けるように拭いた。

堂上は郁の隣に腰掛ける。そして、伏された郁の頭を軽いタッチでポンポンと優しく叩く。

それは、郁が落ち着くように。優しい衝撃だった。

郁は、単調に続く堂上の手が心地よく、グズグズになっていた感情が治まってくるのを感じる。

落ち着いた郁は、深く深呼吸を数回すると、今度こそ話し始めた。

「この本、私の中学の時の先輩が書いたんです。私知らなくて…同期の子に、私みたいなキャラが出てるって聞いてビックリしました。読んでみたら、もっとビックリ」

「ビックリ？」

堂上がさりげなく合いの手を出す。その間も郁の頭に乗せている手は止まる事はない。

「これ、半分以上が実話なんですもん。…私、中学に入学した当初は、まだ陸上してなくて、色々な部活を覗きに行ったり図書室の本を読み漁ったりしてたんです」

その頃から、馬鹿みたいに身長がデカかったんですよー、と涙に濡れた瞳で笑ってみせる。

「ある日、図書室で本を読んでいたら声を掛けられたんです。『姿勢がキレイね』って…そんな事言われたの初めてで照れたのを覚え

ています。それが、先輩と話すようになったキツカケでした。先輩と話すの楽しかったなあ。落ち着きのない私の話も、ちゃんと聞いてくれて・・・なんの部活に入ろうって話した時も先輩が、『笠原は姿勢がキレイだから陸上にしたら？』って。姿勢と陸上の関係性が分からなかったけど、『きつと、フォームもキレイだから』ってススメられて・・・始めたんです、陸上。今の笠原を作った恩人の１人です。・・・勿論、堂上教官もですよ？」

「お伊達はいらん」

で？と、郁に続きを促す。

「陸上を始めて半年くらい経った時かな、先輩に転校するって言われて・・・そこで初めて先輩が難しい病気だと知ったんです。いつも笑ってて全然気付かなかった。気付かせてもらえなかった」

「その先輩は？」

「アメリカに。治療は向こうの方が良かったらしくて。それから、先輩とは会ってなかったんです・・・先輩が・・・先輩が亡くなってるなんて知らなかったッッ！！！」

最後は悲鳴のような声になった。引っ込んでいた涙が、再び流れ出す。

「知ろうとしなかった！違う・・・私は忘れてた・・・あんなに良くしてもらったのに、あんなに好きだったのに・・・最低だ、私」

「それは、違う」

力強い声が否定する。

「どうして、そんな事が言えるんですか・・・」

「今、ちゃんと泣けてるだろう。それは、その先輩が好きな証拠だろう」

「悲劇ぶりたいだけです」

「悲劇ぶりたい人間は、そんな事は言わない」

「どうして、分かるんですか！」

「分かる！伊達に、お前の上官をしていない。上官としての俺をみくびるなよ、お前。部下を把握してなんぼだろうが。だいたいな、

いくら親しい間柄だろうが、離れて暮らしていたら忘れるもんだぞ。四六時中、覚えている方が怖いわ。人間というのは、環境が変わると、それまで主体だったものが変わるだろう。臨機応変って言葉もある事だしな。お前は、今、その先輩を思い出しているし亡くなつた事も悲しめてる。だから、最低だなんて言うな。それこそ、お前の事を書いた先輩に失礼つてもんだらう」

堂上は、いつも間にか放していた手を組み、ベンチに深く座り直した。

ポカンと堂上の話していた郁は、ベンチの上に乗せていた足を降ろし、軽く腰を捻って堂上に向ける。

「本当に、そう思いますか？」

「おう」

そう断言する堂上の言葉に安心する。

間違つた事は違つたという堂上だから。真つ直ぐで尊敬出来る背中だから。

だから、安心出来る。

エヘへと笑って、持っていたハンカチで鼻をかんだ。

「あ！これ、堂上教官のだった！すみません、洗って返します」

「アホウ」

涙の止まり、あわあわする郁に堂上は苦笑した。

「あーらー、教官が笠原泣かせてるー」

いーけないんだー、と笑い含んだ柴崎がすぐ近くに立っている木陰から顔を出す。

「しば！」

2人は、突然湧いた柴崎にギョツとする。

そして、微妙に近かつた身体同士の距離を取った。

「違つて、し、柴崎！あ、もう、お昼う？」

郁は、話題を変えるために、腕時計を覗きながら立ち上がる。

柴崎も追求する事なく郁の問いに答えた。

「そ。休憩になったから、誘いに来たってわけ…あ、そうだ。教官もいなかです？」

基地の近くに来たカフェなんですけどー、と付加える。

普通なら、こんな場面に出くわして、からかい倒すのが常の部下だと知っているだけに、柴崎がこの状況を追求しないのはおかしい。

だが、昼飯だー！と、笑顔を見せる郁に油断した。

「ああ、たまには良いな」

「そうですか」

柴崎は、唇に指を当てて、魅惑的な笑みを浮かべた後、徐に（おもむろに）郁に声を掛ける。

「笠原ー、堂上教官がお昼ご馳走してくれるってー」

「ツ馬！」

「えー、本当ですか？」

物凄い期待の眼差しに何も言えなくなる。

「ああ、良いぞ。食べ食べ」

もう、諦めの境地だ。あの笑顔を突っ撥ねれる人物がいるならお眼に掛かりたい。

堂上は、立ち上がって歩き出した。

私が死ぬまでに何かを残したい。

だから、私は私を残す事にした。

そう考え付いた時、あいつの事を思い出した。

あいつと過ごした時間を書いてみるのも悪くない。

そう思って、これを書き始めたの・・・

あとがきより抜粋

終

どのタイプ？（前書き）

戦争と革命の間

堂郁風味と見せかけて手柴：堂上班＋柴崎

どのタイプ？

「あんたは、普通のエロね。それはもう、ショボイと言える類のエロね」

共用スペースの一角を占領していた柴崎は、たまたま新聞を読みに来た手塚を見つけるや否や、とんでもない事をスッパリと言いつつた。

共に一緒にいた郁は「え、そうなの…」と素直に信じる。

柴崎の突然の言い草に新聞を持って固まってしまった手塚は、その言葉を理解した途端に顔が歪む。

「なんだ、それは！」

「いや、雑誌に書いてたから」

柴崎は自身が読んでいた雑誌を手塚の方へ向けて見せる。

そこには、『女の直感^{ちかた}は当たる！あなたの近くの男性のエロ度はあなた次第！』という文句が書かれていた。

それを見た手塚は、今度はひくひくと顔を引きつらせた。

「なんかさー、この雑誌によると、女がイメージしたエロは大抵当たってるらしいのよ。だから、あんたは普通のエロ」

「何を根拠に…」

「知らなーい。面白いから」

「面白がるなよ」

手塚は椅子を引いて力なく、そこにへたり込んだ。

この女に勝てる気がしない。

「でさでさ、本当なの、手塚？」

郁がキラキラした瞳^めで手塚を見る。なんだか期待に満ちている。

「そんなわけ…！」

「あーら、だったらどうなのよ」

ニヤニヤ顔の柴崎が否定の言葉を吐こうとした手塚を追い詰める。

どうだと言われて、自分のエロさ加減を説明出来る男がいるとしたら、それを売りにしている芸能人が変態か、それを楽しめる人間しかない。

手塚はそれのどれにも当て嵌まらない。

「笠原、きつと手塚はいまどきの中学生でも見せない反応でエロ本にドキドキしちゃうのよ。破廉恥だ、このやろー的にドキマガシながも目線を外せずに赤面よ」

破廉恥って、どの時代の言葉よ、と笑う柴崎の言い草に郁は手塚を哀れみのような顔で見る。

「うーわー」

「勝手に不審な人物にするな！笠原も信じるなよ」

もう泣きたい。なんだ、こいつらは…どんどん脱力する。

だが、そこに救いの手が差し伸べられた。郁が自分から話題を変えたのだ。

「じゃあさ、他の特殊部隊の面々では？」

「特殊部隊ねえ…例えば？」

「た、隊長とか？」

「あれは清純派エロね。見た目とのギャップが激しいタイプ」

「進藤一生」

「正統派エロ。自分のエロさをちゃんと理解しているタイプ」

「緒方副隊長」

「これも清純派。好きな相手の手を握るだけで、いっぱいいっぱいのタイプ」

「…なんか意味がイマイチ良くわかんないけど、スラスラ出てくるもんだね」

当たってんの？と郁が小首を傾げる。

「知らないわよ。ただのイメージだもの。ってか、あんた意味も分からないのに聞いてたわけ？お子様には既にハードな内容だったか」「うっさい！」

呆れた様に言う柴崎に郁が噛み付く。

見事な乙女思考には柴崎の工口談は理解不能だったが、雰囲気的には楽しいのだ。

楽しいだから良いじゃない、という郁に柴崎は、意味も分らないのに？と切って捨てた。

隣で聞いていた手塚は、もはや新聞の読める状態ではない。郁の乙女っぷりにも引くが、尊敬する上官相手に言いまくれる柴崎にドン引きだ。

「イメージだけで上官相手に、よくそこまで言えるな」

「表現の自由よ」

しれっと言われてしまえば、それまでだ。

「……………もう、俺は何も言わん」

「楽しそうだね。何の話をしているの？」

背後から柔らかい声をかけられ、振り返ると入浴後なのか濡れた髪を拭く小牧本人が立っていた。

「あ、小牧きょーかん、お風呂ですかー？」

「うん。で、何の話をしてたの？」

小牧は相変わらずの笑顔で近付いてくる。

郁は柴崎から雑誌を借り受け小牧の前に翳して見せた。

「この雑誌を見てたんです。皆のタイプはどうだろーって」

小牧は雑誌を見ると軽く吹いた。ちよっとだけ上戸に入ったのだ。

「これはこれは…」

「私には意味が理解出来ないんですけどー」

「お子様乙女ですからねー」

「だーまーれ！で、柴崎が言うには、手塚は…なんだっけ？しよばい工口？で、隊長と副隊長は清純派で進藤一生は正統派らしいです」

今度こそ本当に小牧は、ブツという吹き出しと共に上戸に入った。テーブルに突っ伏してヒイヒイと言ってる。言い当てが絶妙だったのか、当たってる、という言葉を笑いの間に付け加えるのを忘れな

い。

「ククク…俺のタイプは話した？」

笑いを含ませながら言う。とても楽しそうだ。

「いいえ、まだです」

「俺ってどんなタイプに見えるのかな？」

柴崎は小牧の顔をジーと見ながら、そうですねえ、と考える仕草をする。

だが、考えたのはホンの数秒だ。真顔でイメージを言う。

「小牧教官は…魔王です」

柴崎の言葉にそこにいた3人が声を合わせて、魔王？と聞き返した。郁と手塚に至っては、その頭上にハテナマークが乱舞している。変な所で似ている2人だ。

「無礼講でお願いしますねえ…一見、爽やかに見えるその外見の内には有象無象のエロを秘めて…とか如何でしょう？」

「それは褒め言葉で受け取って良いのかな？」

笑顔の小牧に対し、柴崎も魅惑的の笑顔を返す。

似たもの同士の会話ほど、底が見えなくて恐ろしいものはない。

郁と手塚は、ぞぞと悪寒が走ったような気がした。

「もちろん。あ、ちなみに堂上教官は」

「

「ムツツリ」

今度は小牧と柴崎の言葉が重なった。

そして、次の瞬間には2人して上戸の嵐だ。

「ククク…やっ…ぱ、り！柴…崎さんもそ、う思う？」

「あれは、ムツツリ以外ないと思いますよー！もうアレはムツツリ王子です！」

「おお…じ！！ムツツリ王子！！ブハッッ！！…アハハ…ひいッ」

腹が痛いとお牧がのたうつ。

置いてけぼりの郁と手塚は突然話題になった堂上が、どうして『ムツリ』と評したのかが分からない。

上戸状態の2人を啞然と見る。

だが、ただ置いてけぼりで進んでいくのは面白くない。

「ちよつと、なんで堂上教官が、ム、ムツリなのよ！」

「あーら、知りたいの？」

「知りたい！」

まだ、柴崎は零れる笑いをどうにか噛み殺し、郁に教えてあげるから耳を貸してと、どこなく意地悪い笑顔を向ける。

そして、内緒話宜しく、耳元でその所以を言っただけで聞かせた。

聞いていく内に、郁の顔が青くなったり、赤くなったりと変化する。最後には涙目だ…何を聞かされているのやら。

それを見て、また小牧が上戸に入る。

手塚は迷子だ。

旗から見たら、上官と下官との和やかな談笑だろうが、その真実は地獄絵図だ。

そこに何も知らないムツリ王子…いやいや、堂上が財布を持って現れる。

なんとタイミングの良いというか間の悪いと言っか。

「お前は何をしてるんだ？」

堂上の登場に、小牧の上戸に拍車が掛かる。

そして、郁は「ひいッ」と悲鳴を上げ、座っていた椅子から音をたてて立ち上がった。

その顔は真っ赤で涙目だ。

「笠原？」

どうした、という台詞を言う前に、郁は「恐ろしい！」という悲鳴ともつかない言葉と共に脱兎の如く逃げ出した。

残された堂上は怪訝な顔をするだけだった……

小牧と柴崎のフォローが入るまでの数日間、堂上は郁に怯えられるのであった。

終

「お前ら、笠原に何を吹き込んだ！怯えた小動物のような瞳^めで見てくるぞ！」
という堂上の困惑が、フォローきつかけになったとかならなかったりとか……
なんか、最後とかグタグタになってしまった（汗）
どうでしょう？

抱きしめて（前書き）

別冊？以降 堂郁結婚後
妊娠表現あり。

抱きしめて

だるい。

このだるさを初めに感じたのはいつだっただろう。

二週間・・・もつとかもしれない。

最初は、あれ、おかしいな程度だった。時々、思い出したかのようにだるさがやってくるだけで、凄く体調が悪くなるわけでもない。だるさと共に微熱も続いていたが、周囲にはバレてないと思っていたし、仕事に支障はきたしていない筈だ。

そんな郁の体調の異変を夫であり上官の堂上篤は薄々おかしいと感じてはいたが、堂上が「大丈夫か？」と尋ねると、必ず、「大丈夫」という返事が返ってくる。

日常の訓練・業務等の問題なくこなしていた。

だが、おかしい。

そう思いつつ、決定的なものがなく、「大丈夫か？」と尋ねる事しか出来ない。

だが、郁は今、ダブルのベッドを一人で占領して瞳^めだけだして頭上の人物を見ていた。

「いつからだ」

心配そうな顔の堂上が、自分と郁の額に掌を乗せて温度を確かめる。郁は、少し低めの体温から感じる心地よさにうっとり瞳を細めた。堂上は、郁の落ち着いた様子に、微熱だな、とひと安心の溜息をついた・・・

早朝、郁は気分の悪さに起きてしまった。

堂上を起こさないようにベッドから抜け出そうとしたが、突然、襲ってきた嘔吐感に郁は、上布団を引っ張る形でベッドの脇にへたり

込んでしまった。

その為、堂上を起こしてしまう事になる。

堂上は、何事かと起きるとベッドの脇で口を抑えて縮こまる郁の姿に、言葉通りに飛び起きた。

「郁！」

あつしさん…声にならない。代わりに、涙目で堂上を見上げる。
くるしい。

「どうした？」

郁の傍らに膝をつき、その背を優しく摩る。

震える声で、「気持ち悪い」とだけ答えると嘔吐感を我慢している代償の様に大粒の涙が出た。

堂上は、郁の抱え上げると、そのままトイレへと連れて行く。
その足通りに不安はない。

「吐いちまえ。ほら、郁、我慢するな」

「む…こう、い…てて」

汚い、と涙を流す郁に堂上は肩を抱いて諭すように言う。

「アホウ。お前をほっとけるか。俺が気になるなら、あっち向いてるから吐け」

そう言うと、今度は背中をポンポンと叩き、郁を促した。

おおかた吐ききった郁は、幾分楽くなったきた。

今度は自力で立ち上がるり振り返ると、まだ心配顔の堂上と瞳が合った。

まだ、額いっぱい汗を後を残す郁だが、その顔から苦しそうな色が消えているのに安堵する。

一歩踏み出した堂上は汗で貼りついた郁の前髪を梳くと「うがいするか？」と問う。

口の中の不快感に、郁は素直に頷いた。

促されてキッチンでろ過機能がついた蛇口から水をグラスに注ぎ、

不快感がなくなるまで数回うがいを繰り返した。
落ち着いてしまえば、今度は居心地が悪い。

いつの間にか、不機嫌顔に大変身している堂上を前にしているものだから余計だ。

郁は、堂上に促されると、有無も言わさぬうちにベッドへ寝かされた。

そして、今に到る。

「うゝ、ここんどこ、疲れが溜まっていたのかな…ちょっとね、だるかったの」

おどけて言つと堂上の眉間の皺を増やし、郁に乗せていた手で額を弾く。

「俺を殺す気か、まったく！健康管理を怠りやがって、馬鹿。明後日から奥多摩だぞ、今日は大人しく寝てろ」

「ごめんなさい」

郁は、素直に謝ると眠りに落ちていった。

落ちていく意識の中で、郁は、「心配させるなよ」という堂上にしでは、弱々しい声色で呟く声を聞いた気がした・・・

チャイムの音が聞こえる。

徐々に覚醒していく脳が誰かが部屋に入ってくる音を伝えてくる。

「かさはら…？」

薄く瞳を開けると、そこには見慣れた美女がいた。

「しばさき」

柴崎…もとい手塚麻子になった新妻は、郁の目の前で携帯を振って見せた。

「堂上教官から様子見てくれって頼まれたのよ。どうなの？」

「眠い」

「気分は？」

「んー、悪くないよー。お腹すいたし」

「起きられるようならいらっしやい」

麻子様が何か作ってあげるわよー、とウインクを残すとベッドルームから抜け出した。

パタンと閉められた郁は、簡単に部屋着に着替えると柴崎のいるだるうキッチンへと向かった。

キッチンでは、自分の家から持ってきたのか、堂上家になかった食材がいくつかある。

「なに、作ってくれるのー」

小さなテーブルの椅子に座りながら、手際良く調理をする柴崎の後姿を見る。

この新妻姿を手塚は毎日見ているのか、と何気なく思う。今度、からかってやろう。

「野菜スープとオムライス」

「わぁ！おいしそう！！」

「野菜スープは家から持ってきたの。2日目だからきつと野菜の甘味が出て美味しいはずよ」

わくわくとした気分で料理が出てくるのを待っていたが、いざ目の前に並べられ、その匂いを嗅ぐとさっきまであった食欲が一気に失せる。

その代わりに、また軽い嘔吐感が襲ってきた。

「う……ごめ……」

「良いわよー。でも、野菜スープは食べなさい。何か胃に入れた方が良いわ。で、病院行きましょ」

「病院……？」

「質問しまーす。体がだるいと感じたのはいつぐらいですか？」

「え、なに、急に」

「良いから答える」

「二週間……もつと前かも」

「食欲はどうですか？」

「ある日とない日が差が激しいかも」

「嘔吐感は…あるわね。次、生理は順調にきていますか？」

「えっと…あれ…ちよつと待て…あれ…二ヶ月くらいきてない？」

初めは気付かなかった柴崎の質問の意図をいくら鈍いといっても気付く。

それだけに戸惑いが強くなった。

「まさか」

「そのまさか、よ。けど、確信も持てないから、ちゃんと検査しましょ」

ほら、少しは食べなさい、と柴崎は自身の食事を再開した。

匂いに嘔吐感が込み上げてきた郁だったが、ひとくちスープを啜るとその野菜とスープの甘味が自分が空腹だったのを思い出させた。

ひとくち目がキツカケだったのか、二口三口と食が進み、柴崎が用意してくれたスープを間食してしまう。

そして、一服したのち、ラフな服装に着替え、図書基地玄関に呼び付けたタクシーに乗り込んだ。

病院は基地は歩いていける距離だが、今回は大事をとってのタクシ―だ。基地近くの総合病院に着くまでの間、もんもんとした気持ちが増して頭がグルグルする。

怖い。

もしかして。

期待と不安。それが、同時に襲ってくる。

どうしていいか分からず、郁は意味もない話題を柴崎に振る。

がしかし、話が続かず反対に柴崎に「落ち着いたら？」と言われる始末だ。

これが落ち着ける状態か。

だが、そう言われてしまうと黙るしかない。

病院に着くと直ぐに受付を済ませた。

幸い他の患者は少なく、一時間待たされた程度で診察室に入れた。

柴崎は受付にある雑誌に手を伸ばしながら、待っているわと手を振る。

ちよつとだけ、後ろ髪を引かれる感じはしたが、看護婦に促されるまま付いて行き検査が始まった・・・

「ほら、泣き止みなさいよ」

だつてえゝ、と顔から鼻水と涙を駄々漏れさしている。

検査を終えた郁は、柴崎の顔を見た途端、放心していた思考が戻ってくる。

みるみる内に顔が歪んでいき、柴崎に抱きついて子供の様にわんわんと泣き始めた。

柴崎は、背中をポンポンとリズムをつけて叩き、病院に備え付けられているカフエへ移動する。

その時も、ずっと柴崎に抱きついたままで引き摺られる様に歩く。デカイ子供だ。

無理矢理、座らされた後、柴崎はその前の席へ腰を落ち着け、すぐ来たウエイトレスに郁にオレンジジュース、自分にコーヒーを頼んだ。

「おめでとう、で良いのかしら？」

「ありがとうー!!!」

それだけで答えが分かった。

「今、何週目？」

「えつと...5週目に入ったとこだつて。あ！篤さんに知らせなきゃ！」

いそいそとバッグから携帯を取り出そうとした郁を柴崎が止める。

「こら。そういう事は、本人を目の前にして言つてやんなさい。あの人絶対、泣いて喜ぶわよ」

携帯を握り締めて頬を染める郁を微笑ましく見やりながら肯定する。ついでに、病院だからと携帯の電源を落とすと言う。

郁は柴崎の言われるがままに電源を落とすと自身のお腹に触れながら呟いた。

「喜んでくれるかな」

「会ったり前でしょー。号泣よ号泣。あ、けど、悔しいいなあ、絶対、子供を同級生にしたかったのにー」

「ええッツ！」

そこに、注文した飲み物が届けられ話が中断する。が、郁は驚いたままだ。

柴崎は、そんな郁を置き去りにしてコーヒーにミルクと砂糖を入れながらしれつと言いつつ放つ。

「私、後2年は2人で過ごしたいのよ。あんた、次は2年後に作ринаさい」

「何を言う…」

「想像してみなさいよ。私とあんたの子供が同じ年で仲良くしているところを」

郁は、ちゅーとジュースを吸いながら、一生懸命想像を膨らます。

一緒に保育園、一緒に学校、ご近所の幼馴染み…しかも、それが親友の子供、たまらなく楽しいかもしれない。

「たまらん！！」

「でしょーが！だから、2年後よ2年後」

「あ、篤さんに相談しとく・・・」

「よし！」

柴崎は郁の返事に満足して、落ち着いた事だし帰ろっか、と席を立った。

衝撃の事実気分が悪さが吹っ飛んでいる郁もすこぶる良い笑顔で立ち上がった。

「市役所寄って帰るわよ」

「え、なんで？」

「母子手帳いらないわけ？」

「あ、いる！」

帰りもタクシーを使い市役所経由で基地へと戻る。

家を出てから4時間が経っていた。

郁は足取りを軽く、やや弾んだように歩いて官舎に向かう。

徐々に近づく官舎の前に人影がある。それは仁王立ちして待ち構えていた。

堂上である。

「あれ…あつしさん？」

「あらら、お出迎え」

にんまり顔の柴崎とは反対に、堂上の顔は心配を通り越してイラついている表情だ。日頃の皺より今は深く眉間に刻まれている。

目の前に郁に来るのを待ってから怒鳴った。日頃の訓練の賜物だ。その声はデカくて鋭い。

「携帯の電源も入っていない！待っても帰ってこない！どこ行つた！」

「ええ、携帯：あ！切ったまんまだった」

「柴崎も、なんだあのワケ分からんメールは！」

『笠原が大変な状況です』

柴崎は市役所から帰る前にそう堂上にメールを入れ、電源を切っていたのだ。

そんなメールをいきなり送られた堂上は意味が分からず、すぐさま郁に掛けたが繋がらない。もちろん、電源を落とした柴崎も繋がらなかった。

心配と動揺が堂上を襲う。

一度は落ち着こうとしたが、今朝方の郁の様子が頭を過ぎり落ち着ける状態になれない。

定時には、まだ少しあったが、堂上は緒方と小牧に断りを入れて早

引きして今に到っている。

郁の帰りを待つ間、生きた心地はしなかった。

姿を見て緩んだ感情が怒鳴りとなったのだ。

「教官、心配させたのはすいません。けど、怒鳴らないで下さい」

柴崎はちよつとやり過ぎたかと内心、思いつつ素直に謝る。

「笠原、私行くから。体、冷やすんじゃないわよ」

そして、郁にそう告げると失礼します、と自身の家へと歩き出した。残された郁は、幾分しゅんとしている。

怒鳴った堂上はちよつとバツが悪そうに頭を掻くと、今度は小さく告げた。

「心配した」

「ごめんなさい」

「どこ行つてた？」

「えつと、あのね…」

「ん」

「篤さん、ギョつてして」

「は？」

「いいから、ギョつてして」

突然の申し出に、ここぞか？と戸惑いを見せる。

いつもの郁なら、恥じらいが強く人前でこついったコミュニケーションを強請らない。

「今、ギョつてして欲しい」

だからこそ堂上はそう望む郁の要望に答えた。

彼女がちゃんと感じるように少し力を入れて抱き締める。

郁は堂上の肩に顔を埋めて力いっぱい堂上の香りを嗅ぐ。

安心する匂い。堂上の匂い。

大好きな人の匂い。

「篤さん、あのね…柴崎と病院行ってきたの」

郁の口から出た単語に心配が再び芽を出す。

「なんかあつたのか？」

「あつた。結構、ヤバイこと」

「郁？」

郁は堂上から身体を離すと、バッグの中から1冊の手帳を取り出した。

「柴崎に感謝しなきゃ。このまま知らなかったら明後日からの奥多摩で大変な事になってた」

「本当か」

「うん、5週目に入ッ・・・」

郁が言い終わる前に再び強く抱き締める。

「なんか、色々言いたいの嬉し過ぎて言葉が出ん」

「嬉しい？」

「ああ、嬉しい」

「もっと抱き締めて。篤さんの温もりがね、たくさん言葉を伝えてくれるの」

〈後日談〉

柴崎の同い年計画。2人目は2年後に作れという事を伝えると堂上は苦笑を漏らしたらしい。

のちに出来るであろう女性隊員のために初女性特殊部隊員として、今後への前例を郁は作っていく事になる。

終

チョコとキス（前書き）

堂上×郁 結婚期間です。

チョコとキス

今日は堂上より早く仕事があがった。

4月から新人隊員の教育を担当する事になり、準備など慣れない事ばかりで自然と残業が増えていた郁にとって、それは本当に久々な事だった。

帰った時に家に明かりが灯っていると嬉しい気持ちになるのだが、最近はいつも堂上が先に帰っている事が多いので、愛する夫に美味しい料理を作って帰りを待つ、というシチュエーションに顔がニヤけてしまう。

帰宅する前にスーパーによって食材を買い込み、堂上の好きなビールも買うのを忘れない。

ちよつと重たいが、そこは戦闘職種の力が発揮される。

レジを通し、帰ろうとした時、小さな箱が可愛い包装紙に包まれワゴンに盛られているのに気付いた。

そうだ・・・

もうすぐバレンタインだ。

また、この季節が来たのか、と自然と溜息が漏れてしまう。

1年前はまだ堂上と結婚していなかった。

あの時は、徳用キットカットの袋を盛ったが、特殊部隊の面々にブーイングの嵐を頂いたのは記憶に新しい。

どう考えても、女子＜男子の割合が理不尽の特殊部隊において、コンビニチョコでさえ高額な出費になるのだ、それをあの連中はネチネチネチと：大人気ないというか何というか。

それでもやはり、日頃お世話になっている方々だ。

バレンタインは小さなお礼には丁度良い。

郁は、ワゴンをスルーすると、もう一度、店内へと足を向けた。

「ただいま」

堂上が玄関から声を掛けると弾んだ声がパタパタと足音をさせて走ってくる。

「おかえりなさい」

「ああ、ただいま」

「今日は早くあがれたから、腕によりをかけたんだよ!」

ネクタイを外しながら廊下を歩く堂上の後ろをピョコピョコと郁が付いていく。

そして、リビングに入ると堂上の前に躍り出て小さなテーブルへ両手を翳す。

「ジャジャーン、肉団子と白菜のスープと海老とブロッコリーの炒め物ー!これ、ちょっと自信作。今出来たとこだから温かいうちに食べよ」

「凄いな。美味しそうだ」

堂上の言葉に郁がエヘへと笑う。そして、堂上が席に着くのを待ってから、ご飯をよそい冷蔵庫からビールを取り出した。

「はい、篤さん」

「ああ、サンキュー」

郁も席に着くと手を合わせた。ザ・合掌。

「いただきます」

食事が終わり、郁はリビングのソファに座り、堂上はそのままテーブルで燻製を着に日本酒を飲んでいる。ビールから日本酒へ移行したようだ。

それを横目に郁はテレビを付けて流行のクイズ番組を流すが、テレビには一切目をくれない。その代わりに先程スーパで買ったものをソファテーブルに広げた。

そして、気合を入れる。

「よし!」

チョコレートバラエティ袋を開けて、5、6個ずつを透明のフィ

ルム型袋に入れていく。

一個一個リボンを結んでいくのは、めんどくさいのでそこはセロハンテープで止める。表側を花型のシールを貼って見栄え良く仕上げれば完璧だ。

没頭して作業をしていると、いつの間に近付いてきたのか堂上が郁の腹に腕を回して引き寄せた。

「わわッッ」

引き寄せられた身体は堂上の胡坐を掻いた上に座らされる。

「なにしてるんだ？」

「えっと、バレンタインの準備」

ピクリと堂上の眉が動く。

「結婚したんだし、やらなくて良いんじゃないか？」

「それは駄目。絶対、あの人たち文句タラタラ言うのに決まってるもん。去年、キットカット盛りで文句言われたから今年は、プレゼント風にアレンジしてるの」

どっちにしても文句言うのよねー、とチヨコを袋に詰めながら溜息を付く。

「あー、あの人たちはなー」

堂上も毎年の事を思い出しながら苦笑する。

「あ、篤さんのは期待しててね！今年は生チヨコに挑戦したんだよー」

堂上の胸に頭を預ける形で郁が幾分声を弾ませて言う。

「ああ、期待してる」

チヨコより甘い笑顔を郁に向けた。

結婚して1年が立つが、未だに堂上の甘い雰囲気にも照れる。

郁は顔を伏せて赤くなった顔を堂上から隠した。

顔を伏せたが、後ろから見る耳と首筋が赤くなっているので赤面しているのはバレバレだ。

「郁、こっち見る」

郁は首を振って拒否する。

「郁」

それでも向かない郁の赤い首の裏にチュウと音をたててキスをした。

「あ、篤さん」

「やっと向いたな」

「もう！」

「ちょっと待つてろ。こっち見るなよ」

郁の頭をクシャリと撫でるとソファへと下ろし堂上が寝室へと歩いていってしまった。

堂上の不明な行動に小首を曲げていると寝室のドアがカチャリと開く。その音に慌てて前を向いた。

夫の言い付けは絶対だ。

先程、座っていた場所に再び腰掛ける気配がする。

「篤さん・・・？」

郁の困惑声を無視して堂上が郁の腰を引き寄せた。

「郁、こっち向け」

「？」

あつちを向いてろと言ったりこっちを向けと言ったり、なんなんだと郁が眉を顰めながら振り返った瞬間、堂上が郁の頭をグイッと引き寄せた。

深い口付け。

突然の事だったので郁の息が中途半端になってしまい苦しい。

だけど、甘い。とても甘いものが口内に広がる。

その甘さを堪能しながら郁も堂上へ応えていく。

そして、ゆっくりと唇を離れた・・・

「な、なに… チョコ？」

荒い呼吸をしながら郁が堂上を伺う。

堂上はチョコに汚れた郁の唇を舐めてから、郁の目の前にキラキラとした包装紙に包まれた丸いチョコの入った瓶を渡した。

「え？なに、なんですか・・・？」

「バレンタインチョコ」

「私に？」

「たまには良しとしたもんだろう」

堂上の顔と瓶を交互に見詰める。何度も見詰めるうちにどんどんと堂上の顔が赤くなっていく。

ガラじゃないと照れているらしい。

可愛い。

これをどんな思いで買ったのだろう、と考えると凄く嬉しく思う。

「ありがとうございます。嬉しい!!」

破顔した笑顔で礼を言う郁にまだ照れている顔で微笑む。

この笑顔だけでこっ恥ずかしい思いをした甲斐があるってもんだ。

「けど、どうしたの、急に」

「なにがだ」

「めちやくちや嬉しいけど、篤さんのキャラじゃないじゃない」

郁の最もな疑問にその時を思い出しているのか遠い目をした。

「あー、この前、隊長に頼まれて買出しに行った日があったろ」

「ありましたねー」

「でな、その帰りに、いきなり小牧が言い出してな。毬江ちゃんに逆バレンタインするから俺も奥さんに贈ったらどうかって・・・最初は断ってたんだが丸め込まれた」

「小牧教官ですからねー」

堂上が羞恥に頭をガシガシ掻いてそっぽを向いてしまった。

それがまた可愛らしくて愛しさが増す。

男の人に可愛いって言うって褒め言葉じゃないと怒るけど可愛いって思ってしまう。惚れた弱みか。

郁がクスクス笑いながらガラスの瓶を電気に翳し（かざ）、キラキラとした包装紙を楽しむ。

その時、丸い包みの中に1つだけ異なる形の物を見付けた。

小さな四角い包みだ。

何だ？と堂上を伺うが、まだそっぽを向いたままだ。

瓶の中から四角い包みを取り出すと感触から、それがチョコじゃない

いと分かる。恐る恐ると包みをあけてみるとそこには

「カミツレっぽいだろ」

「篤さん、これ…」

細い華奢なブレスレット。パール状になっている花柄の飾りがいくつも付いている。

その花がカミツレによく似ていた。

堂上が郁からブレスレットを取り、郁の細い手首に付ける。

「これも？」

「たまたまだ、たまたま」

「篤さん！」

郁が堂上の首に抱き付いた。

そして、音をたててキスをする。郁からのキスだ。

いつもは恥ずかしがってなかなか郁から仕掛けてくる事がないだけに堂上の心臓がドキンと跳ねる。

「ありがと、大好き！」

本当に嬉しいようで、その瞳が潤んでいる。

頬をピンクに染めて堂上の首に頭を押し付けて甘えてくる妻に、

「こんなバレンタインも悪くないな」

と思い、事の発端の小牧に今さらながら感謝した。

終

いつも不思議（前書き）

堂上×郁 新婚時代
めちゃくちゃ 短いです。

いつも不思議

「ホーント、不思議だわ」

堂上家の食卓に、今夜は柴崎と堂上班が揃っていた。

新婚生活も落ち着きを見せた堂上夫婦の元へ夕食をご馳走になるために集まっていた。

男性陣は食より酒みたいで席に着くや否や酒盛りだ。

女性陣はそんなわけもなく、郁が作った料理でおもてなしだ。

柴崎は自分のコップを傾けつつ感心したように呟く。心底不思議がつている風だ。

「柴崎！嫌なら食うな！」

「嫌とは言つてないでしょ。不思議なだけ」

「不思議って？」

「だってあんた、これ見て何も思わないわけ？」

「なによ」

「このなにを作ったのか、かろうじて分かる品の数々・・・なのに！味はめちやくちや美味しいって詐欺でしょ、あんた」

テーブルに並べられたお皿には不恰好な物体？が乗っている。

それが何なのかは何となく分かる程度の品物である。

だが、それを食してみると、見た目を裏切る絶品ばかり、どんな調理法でこうなるのか想像も付かない。

「それ、俺も思う」

横から手塚が郁特製キャベツのミートソース煮のようなものを食べながら言う。

餃子の甘酢あんかけのようなもの（しつこい）を食べた小牧も、うんうんと相槌を打つ始末だ。

全く失礼である。

「美味しいなら良いじゃない！」

「良いけど…料理って見た目も重要だと思うわよ」

「初めて見た時、こんなものを堂上一生に食わせてんのかと心底心配したぞ」

「手塚！失礼にも程があるわ！」

プリプリと顔を膨らました郁が自身のために用意した口当たりの良いワインを一気に煽った。

こら、郁、とそれまで黙っていた堂上が郁からグラスを取り上げる。代わりにウーロン茶のグラスを渡すのを忘れない。

「暫く、それ飲んどけ。また、倒れるぞ」

「う…はあい」

ちよつと熱くなった内心をウーロン茶で冷やす。

食事は始まったところだ。まだ、寝オチするには勿体無い。

「確かに、郁の料理は見た目は凄いが美味しい。栄養面もちゃんとしている」

「篤さん大好きーッッ」

堂上が郁の頭をポンポンと撫でながら褒める。

新婚カップルは今日もピンクオーラ全開だ。

テーブル内の料理を見ていた小牧も栄養面をしつかり考えている料理に感心する。

「そうだね、俺たち体が資本の職業だけに笠原さんの料理は助かるね、堂上」

「ああ。それに、料理は俺もしてるから追々お互いが上手くなっていけば良い」

「あははー、ごちそうさまー、旦那様」

「黙れ、小牧」

パクパクと見た目の悪いトマト炒めを食べながら柴崎がふうと大きく息を吐く。

「それにしても、笠原が料理出来るなんて知らなかったわー」

「リンゴの皮むきすら出来なかったもんね、お前」

「うッ。い、今は出来るもん！細かい事は性に合わないの！これで

も大学時代はよく料理してたんだから！」

「大学って1人暮らしだっけ？」

「うん。大学から近かったから、泊まりがてらに呑みに来てた陸上部のメンバーに料理作ってたよ」

よく食べるヤローに好評だったんだから！と自慢げに胸を張ってみせる。

が、聞きづてならない言葉を聞いた堂上は郁にツツコミが入った。

「ちょっと待て、お前」

「んー？」

「泊まりがてらって言ったな」

「言ったねー、どうしたの、篤さん？」

「アホか、貴様！！」

堂上の怒鳴り声に、えー、なにがあ？と郁が首を傾げる。
今日も堂上家は平和だ。

終？

うかつ娘（前書き）

堂上×郁 新婚さん

SSS、小ネタシリーズ いつも不思議の続き？

うかつ娘

「アホか、貴様！」

先程まで自分の頭を優しくポンポンしてくれていた人物と同一人物なのかと首を傾げたくなるような堂上の変わりように郁は困惑する。

なにか、いけない事言っただかなー？

「迂闊だと知ってたけど、あんたってとんでもない迂闊娘ね」

柴崎も呆れ口調だ。

「へ？なにが」

「お前・・・」

何も分かっていない郁に手塚は何も言えない。

言えるはずもない。チラリと堂上へ視線を流すとんでもない不機嫌オーラを纏っている。

笑い仮面の小牧でさえ笑えていないのだ。

もう、堂上が不憫で仕方が無かった。

「あれだね。笠原さん、本当に無防備過ぎるよね、よく今まで無事にこれたよね」

「へ…無事につて？」

「だーからー、1人暮らしの女の子の部屋に彼氏でもない男を入れるって、どういう見よ。しかも、泊りって、迂闊娘としか言いようがないわ」

やっと、みんなの言っている意味を理解して頭振った。

「えーや、違う違う！男女混合だよ、まさか私でも、そんな事しない！」

「だとしてもだ！無防備過ぎるだろ！」

「だって、私だよ？それに、女の子は鍵付き寝室だったし」

「お前なあ、俺は今、心底心臓が痛いわ、阿呆」

「ええッッ」

思わず郁は堂上の心臓辺りを凝視してしまう。

皺を眉間に寄せたまま郁の頭に手を置くとサラサラの髪を梳きながら、堂上は心配そうに言い聞かせた。

「お前と再会する前だぞ。何かあったとしても助ける事も出来ん」

「う…ごめんなさい」

「ん、分かれば良い」

無防備な妻だから。

迂闊な妻だから。

自身を知らない妻だから。

心配はやまない。

だが、自分と出会うまで真っさらだった彼女に、
いるかどうか分からない神という存在に感謝せずにはいけない。

自分の頭に乗せられた堂上の手に自身の手を乗せて手を繋ぎ合う。
お互いの顔を見て笑いあった。

「ちょっと、手塚、私に強いお酒ちょーだい！」

「あ、俺も俺も」

「もう、やってられない。酔わずにはいれないっの、早く、手塚
！」

今日も堂上家は平和だ（笑）

終

カミツレと（前書き）

堂上×郁 革命途中

小牧さんと堂上さんの会話

カミツレと

久々に堂上班が当麻蔵人氏の警護から解放された夜のこと。

コンコンというノックの音と共に堂上の部屋に小牧が顔を見せた。

片手には、いつもの如く半ダースのビールを常備されている。

「入って良い？」

主の許可を聞く前に身体を部屋へと滑り込ませながらも一応、お伺いの言葉をかけるのを忘れない。

堂上はいつもの事だからと気にする事なく小牧が上がって来るのをゴソゴソとツマミをテーブルへと出しながら待つ。

小牧はテーブル越しに胡坐をかいて座ると持ってきたビールを1本堂上に手渡した。

自身もプルタブを開けて一口ゴクリと飲む。

シュワつと喉に広がる発泡感がたまらない。

「当麻先生、寮生活に慣れるの早かったね」

「ああ。ストレスの溜まる環境だろうに。タフだな」

「強い人だから、あんな話が書けるのかな？」

「どうだろうな」

当たり障りのない会話をしていた小牧がタイミングを計ったように、ところでさ、と話を切り替えた。

「この前の笠原さんとのデートはどうだったわけ？」

その絶妙な投下に、口に入れようとしていたスルメを見事に床へとポロリと落とす。

平然と「あ、落ちたよ」と言う小牧に対し、瞬時に顔を軽く赤く染めあげた堂上が怒鳴った。

「だから、デートじゃないと言っただろうがッッ」

「えー、妙齡の男女が待ち合わせをして出かけるのはデートでしょ」

「あれは前から約束していた事でそんなじゃない」

「好きな子相手でも？」

小牧の直球に渋い顔になる。

茨城戦の時の郁の言葉に、まいった、と自身の想いを閉じ込めた箱に蓋をするのを放棄して以来、彼女へ向かう気持ちを否定するのをやめた。

長年の親友にはバレバレな変化なのだろう。

だが、あのカミツレを飲みに出掛けた事柄は堂上の中ではデートではない。

なりえない。

「…お互いの気持ちが交わってないものをデートとは言えんだろう。そんなの笠原に失礼ってもんだ」

「そついう考え方をするか」

だったらやっぱり、あれはデートだったのだと小牧は言葉にする事なく思う。

真面目で頑固な親友のその清々しいまでの男気に尊敬する。

「分かった。けど…堂上、お前、あんなに頑なだったのに笠原さんへの気持ちは認めたわけか」

「うるさい！」

照れて怒鳴る堂上にクスクスと笑いが漏れる。

「じゃ、あれだね。勝負はこの件が終った後だね」

「そうだな」

いつになく素直な返事に小牧は、頑張れとエール送り、自身の缶と堂上の持つ缶をコッソリと合わせ残りのビールを飲み乾した。

絶対に幸せになる2人だから 今はただ黙って見守るだけだ

終

阻止せよ（前書き）

堂上×郁 茨城戦後 革命前
小ネタシリーズ。堂上さんが焦ります。

阻止せよ

喉が渴いた堂上が公共スペースに下りてきた時、同期と部下が談笑しているのに気付いた。

同期はいつものジャージ姿だが、部下は外出用コートを纏っている。堂上は自販機でビールを買うと2人のほうへと歩み寄った。

「なにしてんだ？」

「あ、堂上教官！教官は飲み物を買いに？」

「ああ、喉が渴いてな…コートなんか着てなにしてんだ？」

「もー昼に言っただじゃないですかー。今日は大学時代の友達の結婚式だって。結婚式には行けなかったけど、二次会には参加するんです」

「笠原さんはタクシーを待ってるんだよね」

小牧の合いの手に、はい！と元気良く答える。

そう言えば、今日、そんな事を言っていたような…

だが、今は7時半、結婚式の二次会にしては遅い時間なのではないだろうか？

疑問に思った事を言葉にしてみる。

「時間的に遅くないか？」

「拳式が3時過ぎからだったんです」

「だからか」

「はい。本人の顔見て『おめでとう』が言えるから、私としては嬉しいです」

自分の事のように嬉しそうに話す郁に自然と顔が綻んだ。

「よかったな」

堂上の言葉が柔らかく、しかも、非常に優しい表情をするもんだから郁としては所謂『好きな人』に昇格した上官に、そんな表情を向けられて頬が熱くなるのを感じるってもんだ。

顔が赤くなっているかも、とちよつと焦る。

「タ、タクシーまだですかねー」

このまま堂上を見ていたら憤死出来ると思えた郁は、ワザとらしく瞳を逸らし外を伺う体をとった。

堂上は、そんな郁を気にした様子なく、同じように外へと瞳を向ける。

「何時に呼んだんだ？」

「えっと…7時40分です」

だったら、もうそろそろだな、と言おうとした時、女子寮の方からパタパタという小走りの足音が響いてきた。

「あ、良かった！笠原、忘れ物！」

女子寮に続くドアから顔を覗かせた柴崎は、男の拳ぐらいあるバラの形のコサージュを持っていた。

「あ、着けるの忘れてた！」

「間に合ってよかったわー。私のコーディネートが損なわれるところだった」

柴崎は早足で郁の元に行くと、コサージュに付いている小さな安全ピンを外す。

ほら、コートを脱いでと促され、それに従って郁はコートのボタンを開いた。

そこから覗いたハイネックの部分に慎重にコサージュを付け終ると同時に郁の背後にいる上官たちの存在に気付いた。

「あら、教官方いらっしゃったんですか」

なんと失礼な言い方だろう。だが、そんな柴崎に慣れている2人からは苦笑に近い笑いかでない。

小牧は腕時計を伺いながら口を開いた。

「もうすぐタクシーが来る時間だよ。間に合ってよかったね」

「ホント助かった。ありがと、柴崎」

「明日の食堂ランチ奢ってよ」

「うー、わかった」

お礼だ！と郁が胸を叩く。

その時にまだ、閉めてなかったコートからコサージュが揺れるのを見て柴崎は、チシヤ猫のような笑みを浮かべた。

「笠原、あんた、教官たちにドレス姿見せたの？」

「うっん」

笠原の否定の声に心が笑う。

まだ見ていないから、あの過保護過ぎる上官が平静でいられている、というわけか…柴崎は堂上を盗み見てほくそえんだ。

これから見せてくれるだろう反応が楽しみだ。

「え、その下、ドレスなの？」

小牧が意外そうに聞いてくる。

「ブーツだから違うのかなって思ってた」

「二次会だから、少しカジュアルにしてみました」

柴崎が郁のコートを引っ張って脱ぐよう促す。

それに素直に従った郁がコートを脱いで見せると、ハイネックな衿元から裾に向かって広がるフレアがエアリーな印象を与える薄い桜色したシフォンワンピースが姿を現した。

肩のラインを綺麗に見えるノースリーブタイプで、ウエストのリボンがアクセントになっている。

やや着丈が短い、郁の足の長さを引き立てている絶妙のラインを誇り、黒のロングブーツを合わせる事によってカジュアルに見せていた。

「わー笠原さんキレイだね」

小牧が郁の姿に賛辞を述べる。

だが、堂上は自身のビールに口を付けたまま動きを止めた。

キレイだと思う。

似合っているとも思う。

だが、ちよつと…非常にスカートの丈が短過ぎではないか？

頭の中で言葉が渦巻く。

だが、それが言葉にならないのは堂上が郁のその姿に見惚れているからだ。

彼女のこんな姿を見るのは、痴漢騒動以来だ。

「しかも、これだけじゃないんです」

ふふふと含み笑いを見せた柴崎が郁に「はい、ターン」と掛け声をすると、慌ててそれに従う。

くるりと回った郁に今度は口に含んでいたビールを拭いた。

「おま、それ…！」

少し気管に入ったらしく咳が込み上がる。

郁が突然、咳き込みだした堂上に大丈夫ですかツツ？と声をかけてくるが大丈夫なわけではない。

忌々しい咳が邪魔をし、アホか、貴様！という口癖を声にする事が出来ない。

ゴホゴホと咳を数回繰り返した後、何とか息を整え口を開こうとした瞬間に柴崎によって遮られた。

「あら、笠原、タクシー着てんじゃない？」

「わわわ！本当だ。じゃ、行つてきます！堂上教官も小牧教官も失礼します！」

コートを引つ掴んで玄関を慌てて出て行く郁に、待て！と堂上が止めるが聞こえなかったようで無残にも堂上の言葉だけがそこに残された。

「笠原、無駄な贅肉がないから背中もキレイなんですよねー」

楽しそうに言葉を紡ぐ。

郁のドレスは背中部分が大胆にもぎつくりと開いていた。

形の良い肩甲骨と背中中のラインが丸見え状態になっていたのだ。

「うん、キレイだったね。けど、あそこまでサービスする事ないんじゃない？」

「あら、小牧教官知らないんですか？結婚式の二次会って合コンみたいなものなんですよ。帰ってくる頃には彼氏というものが出来るかもしれないよー」

ワザとらしく挑発するように言う柴崎の意図に早々に気付いた小牧が笑いながらそれに乗る。

「わ、それは大変だね。笠原さんはそれを理解してるの？」

「まさか。あの純情乙女が知るはずがありません」

「それにしても、よくあのドレスを笠原さんが着たね」

「今度、リファレンスの勉強に付き合うのを条件に着させました」

「あははは・・・笠原さんらしい」

放心に近い状態で固まっていた堂上が、柴崎と小牧の会話を聞くなり、物凄い形相でポケットに入れていた携帯を取り出した。迷う事なくその番号を呼び出す。

数回コールの音が響き、まだタクシーの中であろう郁が遠慮がちな声で出た。

「・・・言い忘れていた事がある」

堂上の電話の向こうから微かに郁の声が漏れ聞こえた。

「今日は呑むな」

突然の言い草に文句を言っているであろう郁のキャンキャン吼える声が聞こえるが堂上が一喝する。

「うるさい！寝オチでもしたらどうする！」

そこまで呑みません！と噛み付くが、今の堂上は理不尽でいっぱいだ。

教官、横暴！と郁の叫びに、グツと喉を詰まらせた。

自分が郁の行動に制限を付けて良い間柄ではないと分かっている。

彼女は大人の女性で、彼氏を好きに作る権利もある。

だが、なんとわれようと今、堂上は自分の行動を止めようとはし

なかった。

「じゃ、一杯だけ許す。その代わり、迎えに行くから帰る時、連絡
寄越せ」

妥協案を提示するが、それが不自然である事を自覚しているだけに
堂上の声が弱い。

だが、堂上に恋する乙女は分かるはずもなく、動揺ありありといっ
た感じで遠慮する郁に、堂上は「上官命令だ！」と言って電話を切
り逃げした。

その様子に上戸に入っていた小牧に柴崎が問いかけた。

「なんか、堂上教官変わりました？」

「どうも、茨城で思うところがあつたみたいだよ」

「やっとですか」

「やっと、だね。まあ、これからも長そうだけど良い傾向じゃない
？」

「楽しみですねー」

終

王子様って何ですか？（前書き）

ずっと気になっていた手塚君の話：なのか？
堂上×郁前提 革命後SSS 小ネタシリーズ

王子様って何ですか？

「堂上の退院が決まったな！」

デスクで玄田が豪快に笑いながら隊員たちに声を掛けた。

事務所に集まっていた面々が、隊長の言葉に嬉々として乗ってくる。

「どうも、堂上がいないと物足りないですからね」

「それに、隊長」

進藤がトム笑いをしながら含んだように玄田を呼ぶ。

「やっと、うちのお姫様と付き合うようになったみたいですし」

「いや、長かった！」

進藤の言葉に隊員たちがニヤリと笑う。

「王子様は頑固だからなー、お姫様が好きなくせに…付き合うまで4年？マジで長かった」

「王子様のオトゴコロは複雑だから？」

そこで大笑いが発動された。

今までの堂上は郁に対する想いを頑なに認めようとしなかった。

そのじれったい日々を間近で見せられていた隊員たちは、彼らの進展が嬉しくもあるが、晴れてお姫様を手に入れた男に対して意地の悪い思いが渦巻いている。

その笑いの中にいた堂上の親友、小牧が何やらフオローらしきものを入れる。

いや、フオローではない。

おいしいネタの提供だ。

「堂上は王子様としてじゃなく、今の自分を好きになって貰いたかったんですよ」

「自分を見ろってか！」

「…まあ確かに。笠原の王子様像は凄まじいものがあつたしな」

「そうそう、あんなに王子様スキスキと言われ続けたら、堂上も

自分が王子様ですって言えんわな」

「にしちゃあ、入隊初期から特別扱いしまくりだったけどな」

「・・・天然記念物のような恋愛を身近で見れてたのは貴重だった」
1人の隊員がしみじみと言うものだから何人かの隊員も感慨深く遠くを見る。

「あんな恋の仕方、今の中学生でもせんだろうに」

「やつとだな」

「ああ、やつとだ」

だから 玄田がパンツとデスクを叩く。

「これは、退院祝いも兼ねて、何かせにやあいかなだろ」

「何かって？」

「そうだな、分かりやすく横断幕でも作るか？」

隊長の言葉にニヤニヤ顔の隊員たちに笑いの拍車をかけた。

就業後の事務所に不穏な空気が渦巻く。

何を書くのか、どうすれば堂上から面白い反応をもらえるのか

と各々が色々と意見を出す。

その様を遠巻きに見ていた小牧が、隊長たちの嫌がらせ、基、快気祝いを目の前にしてクククと笑いを漏らさずにはいれない。

本当にあの人たちは堂上の復帰が嬉しくてたまらないのだ。

だが、上官たちの行動の真の意図に気づかぬ手塚は、玩具と化したまだ帰らぬ上官を気遣い小牧へと問い掛けた。

「あの…止めなくて良いのでしょうか？」

「無理だよ、手塚。あの隊長を止められる人間なんていないって」

小牧のその言葉に、グツと言葉が喉に詰まる。

確かに、堂上がいらないこの場で、あの隊長を止めようと思う輩は存在しない。

唯一、この場にいたら止めるであろう上官がその対象なのだから、尚更だ。

手塚は、沈痛な面持ちで止めるのを諦めた。

その代わり、
ずっと疑問に思っていた事を隣で楽しそうにしている上官へ問い掛ける事にした。

「あの小牧二正」

「ん？」

「前々から気になっていたのですが、堂上二正が『王子様』って何なんですか？」

手塚は、確か前に笠原が卒業とか言っていたし、隊長たちも事あるごとに言っていましたよね？と小首を傾げてみせた。

その疑問を耳に聞き入れた小牧は、ブハッと上戸の世界へと旅立ってしまった。

身体を丸の字に曲げて、ここにも天然記念物がいた、と笑いの端々に搾り出したように言う。

上戸の渦にいる小牧に小首を傾げる手塚が王子様の説明を受けるまで後 20分強。

終

阻止せよ 番外（前書き）

堂上×郁 茨城戦後 革命前
『阻止せよ』の続きです。本編よりめっちゃくちゃ長いです。

阻止せよ 番外

「笠原あんた、呑んでないじゃない」

大学時代の友人が結婚した。

予定していた日取りより、新婦の都合で早まった式だった。

ぶっちゃけた話、新婦の妊娠が発覚したのである。

恋愛経験皆無の郁は結婚の報告だけでも驚く事柄だったのだが、妊娠と聞いた時は瞳が飛び出すかと思うぐらい剥いた。

予定していた挙式と出産予定日がかち合ってしまったらしく、それなら安定期に入ってすぐにと突如早められた式は都合が付かず出席する事は叶わなかったが、披露宴二次会には終業後に駆け付けられた。

柴崎コーディネートのカジユアルドレスは自分的には可愛過ぎて似合わないと思っていたのだが、久々に会った友人たちから絶賛されまくるという現象に立ち会う事になり、これにはちよつと驚いた。こじんまりとした洒落た感じのレストランを貸切にした二次会会場は、立食式となっていて各々が楽しむ形だ。

主役のはずの新婦と新郎は、二次会開始時から接待係へと化している。

先ほど、郁のところにも乾杯用のシャンパンを注ぎに来たところだ。

「あー…あたし、これ以上は呑めないんだ」

「なんで？あ！あんた酒弱かったもんねー」

けど、チュウハイ3杯まではいけた事ない？と郁の過去を知る友は聞いてくる。

確かに、チュウハイにしたら3杯、カクテルで2杯、ワインで1杯までは寝オチせずにいられる量なのだが、今回はどうしても呑めない理由があった。

「勤務先の上司に1杯しかお酒を呑むなって言われてて」

「ハア？何それ！プライベートにまで口出してくんの、あんたの上司」

「今まで、散々寝オチして迷惑かけまくりだから心配されてるだけ！」

「それにしても祝いの席でお酒1杯って…どんな頑固オヤジの言い草よ」

ありえなーいと言われ、郁は内心怒りを覚えた。

堂上の事を一切知らない立場からの発言なのだから、彼女の言葉など酒の席の戯言としてサラリと流してしまえば良い。

だけど、堂上が悪く言われるのは我慢がきかない。

追いかけても届かない小柄なくせに大きな背中も、迷ってしまわないように導いてくれる力強い言葉も、彼からもたらされる暖かい手の温もりも。

それは、彼と関わる事で知る事柄だと分かっている。ちゃんと分かっている。

彼女に悪気はない事も。

ああ、あたし、こんなにもあの人の事が好きなんだ…

上官として尊敬しているし、これからも変わる事はない。

だけど、今、この胸に宿る怒りの正体は、私の好きな人を酷く言わないで！という類だ。

「オヤジじゃない！そりゃ私より5つも年上だけど、カッコイインだから！」

「わ！なによ、どうしたの突然」

「凄く凄く尊敬できる人なの…だから、悪く言わないで」

怒りから段々と悲しい気持ちが増していき語尾が小さくなっていく。

「笠原、あんたさ…」

「小牧教官、あの入、笠原から連絡があるまで、ああも仁王立ちで待ち続ける気ですかね？」

郁が出掛けて行つてから、かれこれ1時間半経つが、堂上は玄関前で仁王立ちしている。

風呂組や外食組が帰つてきたりする度に、物凄い仏頂面の堂上の姿に慄いてしまっている。

そりゃ、鬼と謳われる堂上が仁王宜しく立っているのだ、ビビらない方がおかしいだろう。

「こんなに焦るなら早く手に入れちゃえば良いのに」

「あれだけ遠回りした手前、どう動けば良いのか手探り状態なんじゃないかな？」

「それでも、傍迷惑ですよ、あれ」

共用スペースに腰掛けて3本目ビールを傾けながら小牧は不機嫌な背中を見る。

柴崎も同じようにビールを飲む。もちろん、小牧の奢りだ。

「けど、あんな格好させて、あんな事を言われりゃ堂上じゃなくても焦る気持ちは分かるな」

結婚式の二次会は合コンと同じ、郁が出てしまつてから柴崎が言った発言を思い浮かべて苦笑する。

「あら、小牧教官も焦ります？」

「そりゃね。自分がいない所で好きな子がキレイな格好を他の男が見てるっていうのは焦るかな」

「自分に気持ちに向いてると知つてても？」

「それでもだよ・・・しかも、堂上の場合、笠原さんの気持ちを知らないから余計だよ」

傍から見れば、お互いの気持ちはバレバレなのに、当人同士は何故気付かないのだろう。

とても歯痒い2人である。

「ホント、大変な2人ですね」

発泡感が喉を駆け巡った時、柴崎の携帯がブブブブブとポケットの中で震えた。

仕事が終わってからモード変更し忘れたままだったようだ。

長い震えに、それが電話着信だと分かり、いそいそと取り出すと画面には『笠原郁』という文字が浮かんでいた。

「笠原？」

帰るんだったら、こっちの電話じゃないでしょーに、と不思議がりながら通話ボタンを押す。

小牧に、笠原さん？と尋ねられ、首だけで返事を返し、電話へ対応した。

どうしたの？はあ、今どこよ？化粧室…逃げてきたあ？

柴崎から漏れる言葉だけでは把握が出来ない。

教官に？あんた、上官命令が下ってんだしょ？連絡しなかったら怖い事になるわよ。

どうやら、帰る予定のようだ。だが、堂上からもたらされた理不尽な命令を渋っているらしい。

もし、連絡も寄越さず帰還などしてしまえば、仁王立ち堂上との対面は必須。

こっ酷く叱られるのが見えている。

それに、郁の今の状況も気になった。

ちよつと待ってなさい、そう言うつと玄関前の堂上を呼んだ。

「堂上きょーかーん、笠原から電話ですよー」

耳から離れている上体なのに受話器の向こうから「ヒッ！」という声が聞こえてきた。

「君たち、新婦側の友達？」

会話が見知らぬ声に遮られた。

後ろを振り向くと3人連れの男が立っていた、新郎側の友人なのだ

ろう知らない顔だ。

「そうですよー」

友達が社交辞令でにこやかに答える。

それに気を良くした男達は郁たちを取り囲むようにかわりがわりと話しかけてきた。

「君は姿勢がキレイだね、モデルさん？」

長身を気にする女性がいる事を織り込んだナンパ慣れしている口調である。

自分より10センチ以上高い男から、顔を覗き込まれる様に話しかけられて郁は少し引く。

仕事柄、女性扱いをされ慣れない郁としては、こういった対応にどう対処すれば良いのかが分からない。

どこか悲しい気分を残したまま、突然沸いてきた慣れない状況にあたふたする。

「い、いえ、モデルなんて滅相もないツツ」

「とてもキレイだからモデルかと思った！あれ、グラスがカラだね。なに呑む？ワインは好き？さっき呑んだんだけど、ここのワイン美味しかったよ」

シャンパンを飲んだ郁は既にワインはレッドラインだ。

呑んでしまえば半寝オチになってもおかしくない。

「お酒弱いので、もう」

「そうですよー、この子ったら物凄く弱いんです。代わりに私がオススメ頂いちゃいますねー」

男慣れしていない郁を知っている友達が絶妙のフォローを入れる。

相手に気分を害させない様に媚を含んでみせる。

そうする事で困り顔の郁から自分へと興味を移させようとしたのだが、この男はターゲットを郁に定めているらしくスマート加減をアピールしつつ話題を変えて食い下がってきた。

「仕事はなにをしてるの？今度、食事にでも行こうよ。俺はね、法務省務めだよ」

「法務省、すつごーい！」

明らかに自分はエリートです、という事を含んだ物言いだと分かるが驚いてみせる。

この男が、新郎にとってどの位置の人間か分からないうちは下手に出る事は出来ないのを分かった友達の対応に心の中で郁は喝采を送る。

自分には出来ない腹芸だ。

図書隊勤めの郁にしてみたら法務省勤めに何の魅力もない。

むしろ、良化特務機関のせいで嫌いに近いのではないのか。

郁は図書隊関係者、特殊部隊として軽々しく職業は明かせないものもある。

それに、プライベートの場とはいえ、この男は総務省勤めでもあるし、もし良化特務機関に関わりがあるととなったら最悪の状況になる事は想像に硬い。

言わぬ事に越した事はない。

郁は、一歩後ろに下がると、自分に出来る愛想を繰り出した。

「ごめんなさい、ちょっと化粧室に行きたいので失礼しますねー」

何度もお辞儀をしながら、クルリと後ろを向き、友達の腕を引っ張ってその場をそそくさと移動した。

「はぁー、ビックリしたー」

化粧室の洗面前に両手を付いて頂垂れる。

その横では、口紅を塗り直す友達がいる。その顔はニヤニヤしていた。

「女の子扱いされないと怒るくせに、されたらされたで困る所は変わってないね」

「どうして良いのかわかんないんだもん」

「普通にしてたら良いじゃない」

「普通って！普通にしてたら引かれるよ」

全然、可愛くないし女の子らしくないもん、と文句を言うがそう思

っているのは郁だけで十分に郁は女の子である。

「あの人、多分今出て行ったらまた絡んでくと思うよ」

「えー!!」

なんで!という郁に溜息が出る。

あれは郁がターゲットのナンパなのだと、どうして気付かない。

「あんた、図書隊じゃない、あの人法務省だし…どうすんの?」

「あー、あめでとうって言えだし、帰ろうかなー」

「そうする? タクシーチケットは受付の人に言ったら貰えるみたいよ」

「うん…あ! 電話!」

迎えに行くから帰る時、連絡寄越せ…上官命令だ!

行きのタクシーの中で言われた堂上の言葉を思い出した。

堂上はああ言ったが、好きな人の言葉としたら嬉しいのだが、プライベートの時間に上官に迷惑をかけれないという想いが選考してしまふ。

けど、命令と言われれば郁は逆らえない。

どうしようかと悩んでいたら友達が電話するの? と切り出してきた。

「うん」

「じゃ、席を外した方が良いね。私は会場に戻るから…あの男じゃないけど、時間が合えば食事にも行こう」

「うん。ありがとう」

1人になった郁は携帯と睨めっこを始めた。
どうする?

堂上に電話をかけるか、このまま連絡せずに帰るか…悩む。
どうするべきか悩んだ結果、郁は良き相談相手の番号を呼び出した。
ここは、柴崎に聞いてみて決めよう。ちょっと現実放棄、困った時の柴崎相談だ。

ブルブルルという呼び出し音が響く。

「あ、柴崎？・・・えっと、化粧室。男の人に話かけられたんだけど、その人法務省勤めでね、私、図書隊だし迂闊な事言えないじゃない。どうして良いか分からなかったから逃げ込んだの・・・帰ろうと思うんだけど、教官に連絡した方が良いのかな？・・・うん、上官命令・・・」

電話越しに呆れた声を聞きつつ待つ体制に入った瞬間、受話器の向こうから柴崎の声が遠くに聞こえた。

『堂上きょーかーん、笠原から電話ですよー』

その言葉にヒッ！という声が漏れた。

あんた今、どこにいの！！という言葉は無視される。

次に聞こえてきた言葉は、地を這うような堂上の声だった

新郎新婦に帰りの挨拶を終えた郁は、見通しの良いバス停のベンチに座っていた。

日中は春日よりになって来たが流石に夜になると冷える。

郁は着て来ていたスプリングコートの前を合わせ身体を小さくして保温に勤めた。

そして、先程、化粧室での電話のやりとりを思い浮かべていた

『お前は上官命令も素直に聞けんのか』

「ど、堂上教官！」

堂上の不機嫌な声色に身体が勝手に真っ直ぐになる。敬礼までしてしまいそんな勢いだ。

『で、帰るのか？』

「あ、はい！そのつもりですがッッ」

『場所は？』

「は？」

『会場の場所はどこだと聞いてるんだ！』

「一駅向こうの華月っていう創作料理のレストランです！」

『今から行く』

「や！タクシーでしたら15分で帰れますし」

「黙れ、上官命令だと言っただろう。今から行くから大人しく待ってる」

法務省の面子と出くわしたくなかったものだから、早々に会場を抜け出ていた。

堂上との電話から、まだ5分も経っていない。

繁華街に近い場所でも人通りも多く、まだ10時前という事もあって女性の一人歩きも目立っていた。

正直、堂上が迎えに来てくれるのは嬉しい。

だけど、戦闘職種としても部下としても、プライベートの時間帯にまで心配されるのは悔しいって気持ちもあった。

そんなに信用ないですか、私は

それとも少しは私の事を女の子として見てくれてるんですか

後者だったら良いな・・・郁はヒールの低いブーツの先を見詰めながら思う。

「あ！笠原みーっけ！」

名を呼ばれるのと同時に頬に暖かい物を感じてビクリと身体が震える。

振り向けば、会場で話していた友達がココアのホット缶を2本持つて立っていた。

「あれ、なにしてんの？」

「さっきの男がしつこく話しかけてくるから私も逃げてきちゃった」
はい、とホットココアを郁に渡しながら、その隣に腰掛けた。

「もう帰ったかと思ったのに、何でいるの？」

笠原見付けてビックリしたよ、思わず、その自動販売機で無意識に2本のホットココア買ったわよ、とカツとプルタブを開けながら問うてきた。

「やー！上司がね、迎えに行くからって待ってるって」

普通に考えてもおかしな発言だろ、と思いつつも正直に答える。プライベートでも心配される部下って…

「わ！優しい上司さんねー」

「うん、優しいよ。こっちはいつまで経っても心配かけっぱなしで恥ずかしいのこの上ないけどねー」

「それは違うんじゃない？」

「え」

「いたいたー！2人共、急にいなくなるんだもん。今から帰るの、送って行こうか？」

またもや2人の会話に遮られる。

さっきの今だ、流石の郁でも忘れるはずがない。

法務省勤めの面々だ。

自分でもたいそう嫌そうな顔をしているだろうと思うが、隣の友達は明らかに嫌悪が見えている。

自分がいなくなってから散々嫌な気分を味わったのだろう。

「迎えを待っていますので」

こういう空気を読まない図書館利用者を多々相手にしている郁は、堂上直伝の対処法を最大に發揮して相手との距離を取った断りを入れる。

相手が不快に思わないように、声を勤めて柔らかくした。

「怖いのかな？大丈夫だよ、送ってあげるだけだからさ」
効果なし。

1人は郁の隣に、もう2人は友人の隣へと座る。
肩を組まれそうになり郁は慌てて立ち上がった。

「困ります。本当にもう直ぐ迎えにくるので」

「本当に？」

しつこい・・・内心苛立ちが沸き起こる。

いつも堂上たち班メンバーや悪ふざけは凄いが大人な特殊部隊の面々と接してきているだけに、郁の苛立ちはどんどん増してしまう。
日頃、彼らがどれだけ郁を尊重してくれているのか身に染みる時間だ。

我慢我慢と心の中で念仏の様に唱えていたが、嫌がる友人の肩に腕を回した瞬間に、その我慢の糸がプツンと音を立てて切れた。
わなわなと震える拳を解き放つと、友人の横にいた男の胸倉を掴んでいた。

「嫌がつてんの、見ててわかんないの！」

突然女に胸倉を掴まれボーゼンとしていた男のシャツにグツと力を込めた後にそれを解放する。

郁に下心見せていた男は、法務省というブランドになびかない上に拒絶までしてきた郁に対し態度を180度変えて敵愾心を剥き出した。
てきた。

肩に掴み掛かろうとしているのを横目で捕らえていた郁は対処しようとした瞬間に、後方から伸びてきた腕によって阻まれた。

なんだ！と驚いたが、稲峰司令の誘拐事件の時のようにそれが堂上だと直ぐにわかった。

振り返ると、やはり堂上で、その顔はかなりの不機嫌具合を物語っていて怖い。

「お前は大人しく待つ事も出来んのか」

男の手首を痛いまでに固めたまま郁を睨む。

先程まで沸いていた怒りは、どこかへ吹っ飛んでしまった、それく

らい怖い。

「う・・・」

「怪我は？」

「ありません」

堂上は郁の後ろに隠れる状態の女性に瞳を向けて同じ事を聞く。

ヒーローのような現れ方をした堂上に一瞬心を奪われていた友人は慌てて、大丈夫です！と答えた。

それを確認すると掴んでいた男から手を離し彼女達を隠すように前に立つ。

「で、これはなんだ？」

地を這うような声で男達を問う。

明らかに自分達とは違う身体つきに怯んでいる様子ありありの引け腰だ。

「答える気はないみたいだな…さつさと消える」

時間の無駄だと判断した堂上は男達を解放した。

そして、視界から男達が消えてしまうまで視線を外さずに待った。

完全に消えたのを確認して、縮こまっている郁へ振り返った。

「お前はバカか！」

「う…」

「わ！違うんです、笠原は悪くありません」

物凄い怒号に友人が割って入った。

「あいつ等、多分私を付けて来たんだと思います…笠原は助けてくれただけで怒られるような事はしていません」

だから、叱らないで上げて下さい、と言われてしまえば叱れるはずもなく。

堂上は深い溜息を吐いた。

「わかった。この件に関してはここまでだ。門限も近いし帰るぞ」

「はい。あ！待って下さい、友達を先にタクシーに乗せないと」

「わかつている。俺が乗ってきたの待たせているから、それに乗ってもらえ」

「はい・・・ありがとうございます」

タクシーを待たせている場所に3人で移動した。

そして、友人を乗せて、今度こそ別れの挨拶をしようと窓に近付くと友人が身体を乗り出して郁に耳打ちした。

言葉を聞いた瞬間にボッと瞬時に赤面した。

それを見て爆笑しているとタクシーがゆっくりと動き始めた。

まだ爆笑したままだったが郁に手を振り、それが別れの挨拶になる。

郁は遠ざかるタクシーを赤面したまま見詰めるしかなかった。

「なんだ？」

何かを耳打ちされたのは見ていた分かったのだが、その内容を聞いていない堂上は不思議そうに小首を傾げる。

だが、言われた郁としては、堂上に告げられるはずもない内容だったわけで・・・

「プププライバシーですッ！」

そう言うのと、タクシー捕まえて来ます！と逃げ出した。

『あの上司さんの事が好きなんですよ？あんだ達お似合いだよ』

少し離れた場所で必死にタクシーを拾おうとしている郁の背中を見詰めながら堂上はわけの分からない彼女を想って苦笑した。

終

ちよつとアレな堂上さん 提案編（前書き）

小ネタシリーズ 色々と駄目な堂上さん
革命前

ちょっとアレな堂上さん 提案編

蝉の鳴き声がムカつくとある日のこと。

休憩時間に入っていた堂上班は、特殊部隊事務所にて各々が好きなように過ごしている。

今日は室内業務なのだが、ずっと歩きっぱなしの警備をしていたためにジワジワとした暑さに襲われ続けていた。

ジワジワと感じる暑さよりも、いつそ訓練で汗を流していた方が随分と爽やかな気がすると思ってしまうのは防衛部所以だろうか？

郁もコップいっぱいのお茶を一気に飲み干した後、ぐてえと机に張り付いていた。

ちよつと冷たくて気持ち良い。

あー…来週から奥多摩だなあ・・・あっちの方が山だし涼しいかなあ？

訓練が辛くないといったら嘘になるが、身体を思いっきり動かした後は物凄い開放的な気分になるので好きだ。

ただ、周りには山しかなく図書基地より夏を体感してしまう恐れがあるのだが。

せめて、少しは涼しい思いがしたい、と願わずにはいれないと郁は来週の奥多摩野外訓練の過ごし方について思いを寄せた。

「あーっーいー」

郁は氷だけが残ったコップを見詰めながら項垂れる。

そのだらしない感じに隣にいた手塚が眉を寄せて非難した。

「気分がだらけているから暑いんだ、しゃんとしろよ、お前」

「うっさい！あんただって暑いんじゃない！休憩入って直ぐにシャツのボタン外してたくせに、私だって外したいー！」

郁が言うように手塚のシャツはネクタイが外されボタンも上から3つも外されている。

同じようにボタンを外そうとして堂上に叱られた経験が以前にあり、郁のシャツは上までしっかりと閉められている。

こんな事なら半袖上着で隠れるのだからタンクトップ型のインナーにしとけば良かったと後悔する。

「絶対に去年より暑いつてー」

「それ去年も聞いたぞ」

「うそぉ」

郁は上げていた顔をパタリと机に戻したと同時にバッテリーと景気の良い音を鳴らしてドアから入ってきた人物がいた。

玄田隊長だ。

大股で歩いてくる威圧感に暑さが倍増させられそうだったが、いつもとは違う玄田に郁はあれ？と思った。

玄田の短い髪もその厳つい顔も戦闘服の上半身が濡れていたのだ。

「わ！隊長どうしたんですか！」

郁は立ち上がって机にしまっていたハンドタオルの予備を玄田に手渡した。

すまん、と郁からハンドタオルを受け取ると大雑把に拭くが、あまり役には立っていないようだ。

「何をやらかしたんですか」

それまで黙っていた堂上が物凄いいしかめっ面で玄田に言い寄った。

「んあ？」

「どこかの水道管でも壊したんですかッ」

「え？大事故じゃないですか！」

「それとも、それは隊長の異常な発刊作用が原因ですかッ」

ちやつちやつと吐いて下さい、と詰め寄るが、堂上の吼える様など日常の1コマと化している玄田はどこ行く風だ。

ふん！と腕を組んで胸を張った。

「これは水浴びしただけだ！」

「はぁ？なにしてんですか、あんたは！」

「えー隊長、水浴びですか、良いなあー」

「ああ、気持ち良かったぞ」

「羨ましー」

「アホか！どこが羨ましいんだ、中途半端の水浴びなんてな涼しいのは一瞬なんだぞ」

「それでも、その間は涼しいんですし」

「お前は分かってない。後5分でもしてみろ、今度は逆に暑く感じ出すはずだ」

「えー！」

「風呂から出る時に水浴びして出てみる、分かるから」

「はぁ…でも、水浴び良いなあ」

「まだ言うか！」

ん　水浴びかぁ。

郁はふと、ある事を思い付いてしまった。

言ったら確実に堂上に怒られる事は必須だが、思い付いてしまったからには言いたくなるのが郁だ。

ノリの良い隊長以下特殊部隊隊員たちだ、もし美味くいく可能性が少しでもあるのなら試してみたい。

「隊長！」

郁はサツと挙手する。

「奥多摩には川とか流れてないんですか？」

「お前まさか・・・！」

堂上がすぐさま察して止めようとするが、郁はすかさず言葉を紡いだ。

「来週からの奥多摩訓練の合間で良いから水遊びがしたいです！」

郁の言葉に堂上はやっぱり・・・と肩を落とした。

提案編終

ちょっとアレな堂上さん ムッツリ編（前書き）

小ネタシリーズ 提案編の続きです。
革命前

ちょっとアレな堂上さん ムツツリ編

「それ良いな！」

郁の話聞いていた来週から一緒に奥多摩訓練へ行く特殊部隊の面々が嬉々として輪に入ってくる。

玄田も参加予定であるために、郁の案は即許可された。幸いにも奥多摩のキャンプコースを少し離れた場所に流れの緩やかな川がある。

その前後に雨が降っていなければ安全だと断言できるくらい浅く最適な川だ。

わーい、水遊びーと喜ぶ郁の頭に拳骨を落としながら堂上が盛り上がり始めた空気を切った。

水遊びなど断固としてやめさせる！

「訓練ですよ！我ら図書隊には必要ないでしょーがっ」

隊長の真正面に陣取り言葉を叩きつけた。

小牧お得意の正論を振りかざしてはみたが、逆に白い目で見られた。その場にいる特殊部隊メンバーが相手だと、何故かこちら側が悪い事をした気になるのはどうしてなのだろう。

「教官あたま硬い」

郁からもブーイングが飛び堂上は怒りが噴き上がる。

俺がなぜ断固反対しているのか分かってなさ過ぎだ！

堂上が反対するには理由があった。

郁も一応妙齡の女。

しかも、特殊部隊唯一の女子…まわりにいるのは男だけの環境で水に入るといふ事は水着を着なければならぬという事だ。

男所帯ではないだろう、と堂上は頭が痛くなる。

だが、堂上1人ではこの場を阻止する事は出来ない。

チラリと小牧と手塚を見るが、手塚は何故か瞳が合わないし、小牧は盛大に笑いの国へ旅立っていて希望が薄い。

しかも、当の本人は、もう決定事項なんですよ！、と満面の笑みを浮かべている。

決定事項…この阿呆が…俺は知らんぞ…知らんが、これだけは阻止だ！

堂上は再び肩をガクリと落としながら深い息を吐いた。

「もう勝手に水で遊ぶなりしろ…だが！お前、その時はTシャツに短パンにしろよ」

「はへ？」

なんで？と首を傾げる。

だが、他のメンバーは堂上の意図を的確に読み取り、口元に笑みを浮かべたり、ブフ！と吹く者が続出だ。

それらをキツと睨み付け牽制を図るが、背後から肩を組まれニタニタ笑いをされる。

「なーる程。お前は笠原の水着姿を俺達に見せたくないわけだな」

「え」

その言葉に郁の頬が微かに赤くなった。

「違ッ！……一応こいつも妙齡の女ですからね、阿呆にも恥じらいってものが必要でしょうに」

堂上は否定の言葉を吐こうとしたが、それでは自分が変に郁の水着を意識しているような気がして、あえて呆れたふうを装った。

誤魔化されるのは郁（と手塚）だけで、他のメンバーはニタリ顔が増すだけだ。

「何気に失礼じゃないですかー！！」

「黙れ、阿呆娘」

「ウキ

！！！！！！」

苦し紛れの堂上に郁が噛み付くものだから小牧の上戸が増す。

涙を拭きながら、言葉を紡ぐ為何とか笑いを堪えようとするが、どうにも止まらない。

小牧は笑いで震える声で爆弾を投下した。

「T…シャ…ツとた…短パ…ン…ククク…のほうが…やば…やばく…ない？…ブツッ！ヤベ…笑いが止まんねえ！」

小牧爆弾がドーンと堂上に衝撃を与えた。

堂上の肩を組んでいた同僚が郁には聞こえないように堂上に耳打つ。もちろん、笑い声だ。

「確かに、水に濡れたTシャツはピッタリ肌に張り付くぞ。水着よりもろに体系が露わになる…それよか、いつそ清々しいまでに水着を着られたほうがマシってもんだな」

「な！」

「なんだ、王子様はそれがお好みか？」

耳元でガハハハと笑い声を上げる同僚の横で堂上は耳まで真っ赤に染めていた。

ムツツリ編終

ちょっとアレな堂上さん お買物編

郁は今シヨッピングに来ていた。

奥多摩川遊び企画（？）の水着を買ったためだ。

そして、例の如くいつの間にか川遊び云々事情を熟知していた柴崎も一緒である。

「笠原、これなんてどう？」

柴崎は真っ白ビキニを郁に宛がう。

かなり布面積が薄いがモデル体型の郁に似合いそうだ。

「訓練の合間の水遊びで誰がこんな水着を着るってーの！」

郁は柴崎から水着を引つたくるやいなや水着を元あった場所に戻し、顔を真つ赤にして柴崎を怒鳴り付けた。

わざとなチヨイスなのだろう、柴崎はニヤニヤ顔だ。

「もっと露出の少ないヤツが良いの！」

「Ｔシャツに短パンみたいな？」

「そうそう！堂上教官に言われた時は、何それー！って思ったんだけど、よくよく考えたら良い案な気がしたのになー。何でか、いきなり駄目だって」

なんでだろ？と郁は水着を物色しながら言う。

あの迂闊王子様はあんたの体のラインを誰にも見せたくないのよ、と口には出さずに思う。

ぺったりと肌に張り付いたＴシャツ姿の郁を想像したであろう上官が、その時どんな様子だったのか想像すると楽し過ぎる。

リアルタイムで見たかった！という思いでいっぱいだ。

ずっと思案顔だった郁が難しい顔のまま言い放った言葉に柴崎は驚いた。

「いっそ、ワンピースに」

なんて馬鹿な子なのかしら…

いつもなら可愛い郁の外れた思考に微笑ましさを感じる柴崎だが、今は笑えない。

「それだけはやめなさい」

露出の少ないを考慮した結果出した名案がワンピースだった郁は、ピシヤリと否定されて不満の顔をした。

「なんでよ」

「良いのよー、ビキニよりある意味いやらしさ倍増のワンピースが着たきや着ても。まあ、訓練の合間に遊ぶ水遊びごときで恥ずかしい思いをして後悔したきや止めたいわよ」

ここにきて初めて水遊び云々を猛虎反対した堂上に同情の念を抱いた柴崎だ。

柴崎のいう事は尤もというもので、郁は男女が大勢たある解放的な海ならともかく山の中の川でビキニだのワンピース型の水着を着ることが滑稽である事に気付く。

「ああもつ！じゃどうしろってんのよ！」

頭を抱えて唸り出した。

「だから、私が付き合ってやってんでしょーが」

「けど、ここにある水着ってビキニとかばっかだよ」

「まあまあ、麻子様に任せなさいって」

その頃、堂上はというと公休だというのに、小牧と朝から隊長丸投げの書類を片付けていた。

始業時間から黙々とこなしていた仕事は、なんとか午前中に片付き

そうだ。

「どーじょー」

書類に顔を向けたまま小牧は堂上に声を掛ける。

「なんだ？」

「知ってた？今日さ、笠原さん、柴崎さんと奥多摩水着を買いに行
つてるらしいよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「アレ？なに気にならないわけ？」

「ならんな」

堂上は書類をパラパラと捲りながら即答した。

小牧は書類から顔を上げて持っていたボールペンを指でクルリと回
す。

「へえ、ならないんだ・・・俺は気になるよ」

堂上が小牧の言葉にピクリと眉を動かし顔を上げた。

その反応に機嫌を良くした小牧は、ニコリと笑みを浮かべ自身の意
見を述べた。

「笠原さんはモデル体系でスタイル良いし、なにより凄いのはあの
脚だろ？お前の事、王子様って知ってる特殊部隊の奴らでも、コロ
ツと落ちる輩が現れてもおかしくないだろ？」

「は？」

「だってほら、笠原さん、十分に魅力的な女性じゃない」

堂上は、何言ってるんだ、こいつ？といった顔で小牧を凝視するしか
ない。

「そうだったらさ、もう迂闊に笠原さんの頭にポンポン出来なくな
るね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だってそうでしょ。彼氏がいる女性をむやみに触れないじゃない」
小牧はデスクの上の書類を1つにまとめてコンコンと揃えた。
そして、立ち上がるなり、それを堂上のデスクに置いた。

「はい、出来たよ。じゃ午後から毬江ちゃんとデートだから先に上

がるよ」

そう言うつと固まっ たままの堂上の肩をポンポンと叩いて事務所を後にした。

残された堂上は持っていたボールペンがポトリと指から落ちたが、それに気付かず未だボーゼントしたままだ。

お買物編終

ウサギ泥棒を探せ！（前書き）

別冊？ 堂上とお付き合い中
お泊りデート頃。

オリジナルキャラあり。
途中で話が止まっています・・・

ウサギ泥棒を探せ！

それは、大きな音と共にやってきた

ボタンツツ、と事務室のドアが力任せに開けられ、丁度休憩に入っていた堂上班の面々は驚いて一斉に視線を向けた。

「笠原いますか！！！」

勢いと共に入って来たのは2年先輩にあたる防衛部の女子隊員だ。その形相は鬼気迫るものがある。

突然名を呼ばれた郁は反射的に立ち上がった。

「笠原います！」

その声に入り口付近にいた先輩防衛員は、ガツと顔を向けた。

何も悪い事はしていないはずなのに、ひい、と悲鳴をあげてしまうのは何故だろう。

怖くてちよつと引け腰になる。

先輩防衛員は、ブーツをカッカッカッと地面に叩きつけるようにして郁の方へ歩いてくる。

そして、郁の目の前に来るや否や自身より10センチ高い郁の肩を組んで、部屋の隅へと連れて移動した。

「な、なんですか！なんなんですか！」

バタバタ暴れるが、先輩の顔が怖過ぎて本気も出せない。

助けを求めて手塚を見るが、ガンとして視線を合わせてくれない。

堂上は、未だ固まったままだ。助けは無理そうだ。

小牧は・・・手を振っている。

郁は引き摺られたまま連れて行かれた。

先輩は、部屋の隅に來ると腕で郁を逃げられないように挟み込み、瞳^めだけで男性陣へ向ける。

「男性の方々は近付かないでお願いします」

そう言う先輩は胸ポケットから数枚の写真を取り出した。

それを郁の胸へ押し付ける。

「なんですか、これ？」

怪訝な表情で、それを見ると郁の顔が一気に驚愕に変わった。写真を自分の胸に仕舞う。コンマ1秒の早業だ。

「なんなんですかッッ、これ ツッ！！」

絶叫した。

「と、いう事は、これの存在を笠原は知らないわけね」

「知りませんよ、こんな物ッッ」

顔をブンブン振って否定する。その顔は茹蛸ゆでたこみたいに赤い。

先輩は、そうよね…と呟くと、今度は堂上班男子メンバーに顔を向けると「事件です」と短く的確に告げる。

郁の反応とその真剣な物言いに、それが冗談ではない事を直ぐに理解すると真剣な表情に切り替わった。

堂上は、立ち上がると近付く事はせず、

「なにがあつた」

と、返答を求めた。

「それについては私から」

少々、不機嫌そうな声がドア近くで発せられた。

柴崎麻子である。

ドアの外へ何かしら合図を送ると柴崎は数人の人間と共に入ってきた。

特殊部隊事務室へ毎日のように日参している柴崎だが、他人と一緒に訪れるのは珍しい。

しかも、それが女性で年齢層のバラバラの防衛と業務部だと尚更だ。その数人の隊員に挟まれるような形で業務部の制服を着た男性隊員もいるが、連行される囚人のように頂垂れていた。

堂上班は険しい表情の柴崎に警戒心を強くした。

彼女がこんな風にトゲを出しているのはただ事ではないからだを知っている。

「なにがあった」

堂上がもう一度問う。

「簡単に言ってしまうと『盗撮』です」

その言葉に汚物を見付けた様な顔をした。

そして、郁の持つ物が、その盗撮に関係するものと推測されて眉間の皺が深くなる。

「盗撮と言つても、下着云々じゃないんです」

だから、余計に始末が悪い。

柴崎は苦虫を噛んだ様に顔を歪め、郁のもとへ歩いていくと郁から写真を取り上げた。

男性陣には見せない様に裏返した状態で堂上たちへ写真を主張する。郁は、オロオロとするばかりだ。

「け、けど、柴崎、これって!!」

「普通に見せられるけど、無防備にも程があるって写真が主なんです・・・悔しいわ。こんな可愛いショットを私の断りになしに販売するなんて」

「ちよつと待て!なんで、あたしの写真なのにあんたの許可がいるわけ!」

「あら、これに関しては主張するわよ、私は」

「するな!」

「まあ、確かに、笠原は可愛かった」

先程まで、鬼気迫る顔をしていた先輩隊員も納得の相槌を打つ。

一緒にいた他の女性隊員たちも、うんうんと頷いていた。

「み、見たんですか!他のみんなもお?」

「見た。見たからこそ発覚したんでしょ、これ」

「で、発覚したキツカケはこいつです」

柴崎が女性隊員たちに囲まれている男性隊員を一瞥する。

それに合わせて全員の視線が移動し、男性隊員が伏していた顔を更

に伏して視線から逃げようとするが、視線は突き刺さるばかりだ。男性隊員の隣にいた女性隊員の1人が、手を上げて意見を述べる。

「私が、伊藤一士……こいつの名前、伊藤と言うんですが、私の不注意で伊藤一士とぶつかってしまった時にですね、こいつが笠原士長の写真を落としたんですよ」

「で、彼女が伊藤一士に問い詰めているところに柴崎と私たち防衛部員が遭遇しまして……」

今に至るわけです、と締めくくった。

羞恥と怒気を含んだ顔の郁が、ガシツツと伊藤の襟首を掴んだ。

「ちよつと、あんた、あのしゃ、しゃ、写真をどうしたってーの！

！！」

吐け！吐かないと落とす！と首を締め上げている。郁の意思に関係なく落ちそうな勢いだ。

「か、笠原士長、ぐる……じいです……」

「これじゃあ話す前に死ぬわよ、あんた。落ち着きなさい」

柴崎の言葉に渋々といった感で手を放した。

そして、伊藤の前に回り込み、魅惑的な笑顔を一瞬だけ向けると表情を消した言い放った。

「さ、私たちにした話をもう一度話しなさい」

美人の無表情ほど怖いものはない。

「裏・武蔵野第一図書館っていう携帯サイトがあるんです」

伊藤は自身の携帯を開きネットに繋ぐ。

直ぐに小さな画面に黒背景のサイトが姿を現した。

堂上班の面々はその小さな画面に顔を寄せる。見た事のないサイトだ。

武蔵野第一図書館にもホームページが存在するが、それは図書館紹介、本や映像の検索やオススメ本の紹介、コラム、イベントなどの

日程表などが書かれている至って普通のものだ。

「なんだ、これは」

堂上が凍てつく様な瞳で伊藤に説明の続きを催促する。

「い、いつ出来たのか、誰がサイトマスターなのかは不明なんです。このサイトは図書館隊員の写真販売が主になってます」

ちよつと貸して、と小牧が伊藤から携帯を受け取り操作し始めた。

「なるほど。検索に隊員の名前を入力するシステムか。何人か知ってる隊員の名前で検索かけてみたけど、全員が全員ヒットするわけじゃないんだ」

そう言つて画面を皆に向け直した。

画面には郁の名前が表示されている。

笠原郁：10件

郁の名前に堂上の眉間の皺が増す。

彼女への想いを箱につめて鍵を付けてきた。

それが壊れ溢れ出た思いは強く、彼女への独占欲は半端ではない。

付き合うようになって、肌を合わせるようになって、一緒の時間を過ごす時間が増える度に郁はどんどんキレイになっていく。

自分の手で変わる愛しい人に嬉しいと思う反面、焦る気持ちも増す。

堂上は拳を握り、胸を焼く怒りに耐える。

「ちよつと、この10件つてなにッッ!」

郁は携帯を取り上げて、自分の名前をクリックする。

そこには、いつ撮られたのか分からない画像がズラリと並んでいる。わなわなと携帯を持っている手が震える。携帯がピキッと音を立てたような気がするが今はそれど頃ではない。

「なに!この微妙なの!」

「私も見たけど盗撮にしては、まとも過ぎて本当に微妙なのよね」

と・く・に・こ・れ、と柴崎が持っていた数枚のうち1枚を取り出

す。

「本当に、あんた可愛いわ」

「可愛い言っな」

「私でも、これに1枚に500円出すわ…皆さんも見ます？」

「ひい！なにを言い出すか！」

「いやいやいや、盗撮ながらエロは一切なし。敵ながら素晴らしいカメラ使いよ」

「そこまで可愛いを連発されると見たい気持ちになるね、ね、堂上？」

郁と柴崎との会話に小牧が乱入する。

女性陣たちに深刻な雰囲気が出てないから踏み込めるのだ。

「本人が見せたくないものを見る気はない」

「可愛い彼女の写真でも？」

「郁が嫌がっているもんを無理に見る趣味はない」

「堂上教官ツツ」

郁が瞳を輝かせて堂上を見る。

感動する郁を横目に、柴崎がふふんと笑いを漏らす。

そして、

「それはこれを見た後でも言えますか？」

そう言って写真を堂上のデスクの上へと流した。

堂上のデスクへとヒラリと落ちた写真に自然と瞳が行く。

人間心理、とはそういうものだ。

郁でさえ、自身の写真にも関わらず男性陣と一緒に写真が落ちていくのを見守ってしまったくらいだ。

写真が瞳に飛び込んできた瞬間、堂上と手塚の空気がピキリと凍った。

迂闊で粗野ばかりが目立つ同期のこのような姿を手塚は見た事がない。

いくつだよ、お前と無意識に呟いてしまっていた。

「うわー、確かに。笠原さん、可愛いわ」

1人凍らず、動いていた小牧が体を折り曲げて写真に顔を近付けてしげしげと見る。

そこに写っている郁は確かに可愛かった。

場所はベランダだろう。朝、起きたところだろうと推測される郁が、眠たそうにトロリとした瞳を擦っている写真だ。

問題はそこだけではなかった。

寝巻きだろう衣服はピンク色をしていて、手の先まである長い袖にタレ耳ウサギのフードを無造作にかぶっていた。

フードの中から、ちよつと寝癖の付いた髪の毛が見え隠れしているのも可愛さをアップさせている要素だ。

今もまだ固まっている男は自分のデスクにある写真が悪夢としか思えない。

これは反則だろう。

堂上はボーゼンと写真を見詰めた。

こんなに無防備な顔を見るのは自分だけの特権のはずだ。

ホテルに泊まった翌日、まどろみの中で見せる郁の顔を見るたびに心が温かくなるのを感じる。

愛しいと思う。彼女が愛しい。

だから、周囲がそんな郁を見る事が許せない。

こんな郁を何人の男が見たのか・・・胸に熱い怒りが宿る。

やっと想いが通じ合った大切な女を見せたくない。

「見るな！！！！」

バンっという音がデスクに響く。

力任せに振り下ろした掌は痛んだが、郁の写真を隠せるならこんな痛みは痛みに入らない。

「お前らが見るな！」

「堂上教官？」

周囲に可愛い可愛いと言われ続けていた郁は羞恥で顔を赤く染めていたが、堂上の鋭い怒気に驚いた声を上げた。

「・・・兎に角。見るな」

感情を露わにさせた自分を落ち着かせるために冷静にもう一度言う。そんな堂上に一瞬、小牧が笑いそうになったが、これが自分と毬江の立場だったらと思い直すと、いつもの上戸を引っ込め写真をデスクへ流した柴崎へ顔を向けた。

柴崎もちやんと理解しているので、これ以上のからかいは見せない。

「この程度の写真は今までも結構あつたんです・・・」

特に、堂上班は人気高いですから、と付け加える。

「問題視は：ベランダってところかな？」

小牧が柴崎の言いたい事を先回りして答える。

「そうです。この写真の犯人に限らず、今まで出回った写真は図書館内、訓練やイベントが主だったんです。そんな写真に、いちいち目くら立てるのもバカらしいので放置していたんですが、今回の写真は許容範囲を超えています」

「え？なんで？」

郁が柴崎の言っている違いが分からず訊ねる。

周囲の面々は、そんな郁に対し全員が大きな溜息を付いた。

「あんたねー、よく考えて見なさいよ。あの写真はベランダを撮られてたでしょ？」

「うん」

「だから、その写真を写した奴は女の子の部屋を撮ったの。しかも盗撮」

「うん」

「・・・あんた、まだ分からないの…この犯人は女の子の部屋を盗撮する変態なのよ。風呂や更衣室の写真をいつ撮り出してもおかしくないってわけよ。お分かり？」

これだから、無防備娘はと悪態付く。

一方の郁は柴崎の細かい説明でやつと事の重大さを理解して瞳を剥いた。

「ええ　　ツツ！！！ヤバイじゃない！！」

「だから、さつきから、そう言ってたでしょーが」

堂上は今やつと事の重大さを理解した恋人に呆れる思いと彼女の素直さに愛しさを感じる。

だがそれは、今の状況では複雑でしかない。

恋人の焦った様子に顔を顰めるばかりだ。

「この写真、どこで買ったんだ？」

手塚が尤もな疑問を口にした。

柴崎も心得た体で、その質問に答える。

「伊藤一士が言うところ、欲しい写真の番号を入れたメールを管理人に送ると、郵便局留めの住所と振込み金額を指定してくるみたいです。支払いは為替か現金。その際の氏名は安倍大：ちなみに図書隊内で同姓同名は3名、全員、漢字が違います」

「・・・郵便局留めって、一箇所？」

「それが、二、三箇所あるみたいです」

郵便局留めとは、郵便利用者が郵便物の宅配を断り、郵便局に留め置く事をいう。

事前に特別な手続きは必要ない気軽さ、受け取りを周囲に秘密にしたい場合、差出人に自分の住所を明かさずに済むというメリットがある。

「んー、意外と上手いやり方かもしれないね。口座振込みより足が付き難い」

小牧が腕を組んで感心する。

「ですが、このやり方だと写真が手に入る確証がないのでは？」

「それは、口座振込みでも同じじゃない？」

「後ろ暗い者同士の取引きだ。手に入らなくて騒ぎ立てるバカはおらんだろ？」

騒ぎ立てたとしても取引相手の所在は不明…上手いやり方だな、と堂上が補足した。

携帯で知らされたカウンターの回り方を見る限り、それなりに取引きの信用があるのだろう。

掲示板にはリピーターがいるのが伺える。

「これ、どうします？」

ここで、こんな話をするだけでは埒が明かない。

柴崎は、堂上班、特に堂上に問いかけた。

「決まっているだろう。これは犯罪だ。潰す」

「どうやって？早めに対処しないと、教官、笠原は危険かもしれないよ」

「柴崎、危険って…なんで？」

郁が、幾分真剣に話す柴崎に問いかける。その顔は不安そうだ。

「ここ最近、一気にあなたの写真がUPされてるのよ。それは、あなたが人気があるって証拠。あの可愛いウサちゃん写真でも分かる事だけど、犯人も買い手もきわどい写真を求めているのよ」

いづどこから撮られている写真。

自分が知らないうちに知らない人間が自分の写真を売り、そして買う人間がいる。

こんな事がない限り、発覚しない最低な犯罪だ。

郁は自分が標的なのだという柴崎の言葉にゾッと不快感が募らせた。そして、なによりも怖い。

無意識に自身の身体を抱きしめていた。

「そんな顔しないの。大丈夫よ、そうならない為に今話し合ってるんでしょ」

「う、うん」

まだ不安が抜けない声で郁が頷くと、それを払拭するように堂上に

肩を抱かれた。

力強い手の感触が伝えてくれる。

大丈夫だ。

「作戦会議をするぞ」

彼の言葉に力が漲るのが分かった。

ウサギ泥棒を探せ！（後書き）

この続きから書いてないです（汗）

君の思い出 ボクの嫉妬（前書き）

別冊図書館戦争？のプロポーズ後

堂上が嫉妬しますが、郁は昔が恥ずかしいです。

オリジナルキャラあり。

途中で話が止まっています。

君の思い出　ボクの嫉妬

徐々に空気が変わり、関東図書基地にも冬の訪れが見え始めている。そんな中、関東図書基地は、朝から慌ただしく動いていた。それは、特殊部隊も例外ではない。

全国の図書基地は、地域を大きく分けて、東北・関東・関西・中国・四国・九州・沖縄に存在し、図書館は個人経営、大学や短期大学、高等専門学校を含めたものを合わせると軽く4000を越える。茨城戦でもそうだったが、防衛・業務において応援がいる場合、地域基地へと要請し人員が動く事になる。

教育機関の図書においては、国に定められた資料としているため、良化特務機関は滅多に関与が出来ない。

尤も、良化特務機関による検閲対象になるのは、図書館法のもと、防衛手段を取っている中心都市の図書館だ。情報数が遥かに多いのも対象の1つだろう。

それだからこそ、地方図書館の業務経験・攻防戦の実戦経験の差が激しくなる。

それを回避する為に始められたのが、数年に1、2回の割合で全国の隊員を対象にした研修出張だ。

それは、2週間に及ぶ大規模なものである。

だが、日頃から特殊部隊は、要請があれば年がら年中、各図書館の戦力アップのためにその都度、数人、または全隊ごとに出張をしているので関係がない。

それを、つまらん！と言うのが関東図書基地・特殊部隊隊長の玄田竜介だ。

彼の一言により、関東図書基地では全国図書基地の特殊部隊員候補生を数人受け入れ訓練を付け、候補生たちの適正を見るのだ。

そして今年も隊長の独断により、東北から1名、関西から2名、四国から1名、九州から2名、沖縄から1名、計7名の候補生たちが関東図書基地に赴いていた。

全隊会議室に集められた特殊部隊の面々は、大きなスクリーンの前に整列している候補生たちに興味心身だ。

最後尾の席に座っている堂上班も興味を持って見ている。

特に、郁と手塚だが。

この2人は、新人から特殊部隊所属になったために防衛員の経験がない。

この候補生たちは今は防衛員所属。同期という立場が多いのだ。

「こんな研修、初めてですね！」

「お前らはな」

「俺たちが配属される前も研修があつたんですか？」

「あつたよ。確か、笠原さん達が配属される2年前だったかな…堂上？」

「そうだ。あの時も、あのおっさんの思い付きで酷い目にあつた」

「隊長ですもんね」

「笠原、その言葉だけで片付けるな」

当時を思い出したのか堂上が、痛そうな表情をする。

それを郁がクスリと笑うと、笑うな、と不貞腐れた表情の堂上が郁の頭をこつく。

どこから見てもバカップルだ。

そんな中、研修説明及び特殊部隊候補生の紹介が副隊長の緒方により説明が始まった。

私語をやめて注目する。

約15班に別けられる特殊部隊のうち、7班が候補生を受け入れる事。

2週間の研修の間、なにかしらの障害が起こらない限り（良化特務機関の検閲、図書館業務など）、隊長が組んだ特別メニューをこなす事（これ全班強制）

適正を判断するのは10名、それを判断する人間についてはシークレットとされているために、選ばれた者は他言無用という事。

「以上。解ったか？適性判断する者は、後から隊長から打診があるらしいぞー。じゃあ、今度は候補生自身に紹介でもしてもらうとするか」

整列した候補生たちが、緒方がいる中央から左順に所属図書館名と氏名、階級を述べていく。

郁はほうほうと頷きながら聞く。

やはり、年齢的にも階級的にも郁と手塚と同じくらいだ。親近感が沸くってもんだ。

今のところ、年下の候補生は現れていない。

関西の候補生1人が紹介を終え、次の候補生の紹介が始まった。

その声に、ん？と違和感を感じた。だが、なにが気になるのか分からない。

「関西図書基地より参りました、西井誠三等図書生、26歳であります。研修の間、宜しくお願いします」

「あれ、あの西井って三生、関西のイントネーションじゃないね」小牧が後ろから声を掛ける。

郁が感じた違和感はイントネーションの違いだろうか・・・

「喋り方は、関東か？」

「そうですね、出身は関東かもしれませんね」

堂上と手塚が相槌を打つ。

その間もずっと郁は不思議な違和感が続いていた。

何かを忘れているような、何か、何か・・・思い出しそうだけど出てこない。

すっかり娘である郁は、いつも物忘れで堂上に鉄拳を食らっているくらいだ。自分が物忘れの激しい質だと理解している。

でも今回は、何かが首下まで出掛かっている感じた。

そう・・・あれは、まだ中学生の時、

コノキオクガタダシケレバ・・・

「あ

ツッ！！！！！」

耳を塞ぎたくなる様な絶叫が上がる。

その瞬間、候補生たちの紹介が止まり、シーンと会議室が静まり返ってしまった。ついでに叫んだ犯人はここです、と示さんばかりに立ち上がってしまったものだから注目も浴びてしまう。

その時、ガタツと鳴った椅子の音がなんともマヌケに聞こえた気がした。

突然の事に郁の隣にいた手塚も後ろにいた堂上、小牧も驚いて郁を凝視するばかりだ。

自分のしでかした状況に今さら気付いた郁はサーと音を立てて青褪める。

私はなんて事をしてしまったの　！

「アハハ…アハハハ…なんでもありません。どうぞ、つづ・・・つたあーツッ！！」

笑って誤魔化そうとしたが、堂上からの鉄拳が飛んできた。

「アホか、貴様は！突然絶叫してなんでもないとはいわせんぞ！」
堂上も負けてはいない怒鳴り声だ。

自分でも迂闊だったと分かっているが非難の声が上げてしまう。今も頭がズキンズキンと脈打っている。

恋人：婚約者となった今でも、上官という顔をした堂上に容赦はない。

「殴る事ないじゃないですか！」

「前に指に噛み付かれた経験があるもんでな」

「な！そんな前の事を持ち出さなくてもッ」

「はいはい。ストップ、お二人さん」

小牧が体を郁と堂上の間に割り込ませ話を遮る。そして、机をトンと叩き、壇上を指した。

「注目、浴びてる」

特殊部隊の面々はいつもの事だという風に愉快そうに見ているが、候補生たちはそうではない。

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている事が遠目からも想像出来た。

堂上がバツの悪そうに壇上の緒方に頭を下げた。

「申し訳ありません。続きをお願いします」

ほら、謝れという堂上の言葉に郁も頭を下げようとした時だ。その声が郁を呼んだ。

「笠原？笠原郁か？」

候補生の西井が驚いたように声を上げた。

今度は、西井へと視線が集中する。

関東で女性初の特殊部隊員という肩書きは全国的にも有名だが、『笠原郁』という名前は知られていない。

茨城戦や当麻蔵人氏を大阪へと送り届けた時のように事前に情報を流してない限り彼女を守護するために伏せられていると言った方が正しいだろう。

そんな対象に対し、フルネームで呼んだ男は何者なのか…他の特殊部隊員は怪訝な表情をする。

郁はというと、やはり自分の記憶通りなのだと思い力なく椅子に座り込んだ。

「西井…」

「おい、知り合いか？」

隣に座っていた手塚が尋ねた来るが返事をしない。

出来ないのだ。今、郁の頭の中はグルグルと過去の自分が回っている。

本当に・・・

あそこにいるのは彼なのか

あの時、私はなにをした・・・

「ギャア

ツッ！！！」

今度は突っ伏して両耳を塞いで物凄い勢いで顔を振り出した。

「お、おい」

手塚が身体を仰け反らせる。郁の頭振りの余波らしき風を感じて顔を引き攣らせた。

どんだけだ。

堂上も郁の突然の奇行に驚くばかりだ。

「い、郁・・・笠原？どうした、お前」

「おい、笠原、知り合いかー？」

壇上にいた緒方も訊ねてくる。

郁は渋々顔を上げると西井の方を見ない様にながら緒方の質問に答えた。

「同級生です、中学の…」

郁の言葉に特殊部隊の面々が興味深そうに西井を眺める。

だが、先程の郁の態度はいただけない。いつもの郁ならば同級生に会って喜びこそすれ悲鳴をあげるのはおかしいだろう。

「同級生に対する態度かよ。最悪だぞ、お前」
手塚が指摘する。

郁もそれが分かっているためか少々バツが悪そうだ。

「うっさいー！驚いたんだもん」

「驚いたって態度か、あれが」

「驚いただけなの！」

ぎゃいぎゃい騒ぐ郁たちにもう一度、緒方の注意が入った。

まだ、候補生の紹介は終わっていない。

郁は自分のやらかした失態に焦りながら壇上へ向かって謝罪を入れた。

今度こそ止まっていた候補生紹介の続きが開始されるが、その間も特殊部隊の興味津々の視線はやむことはなかった。

一方、未だ拳動不審の郁を眉を^{ひそ}顰めたまま、何かを言いたそうにその横顔を見詰めてる堂上を横目に小牧は、この研修も平和に終らない予感をひしひし感じて、これからを思い小さく溜息を付いた。

玄田の面白いから！の一言で西井誠は堂上班が担当する事に決まった。

事務室へと戻った郁は落ち着かない様子で、堂上たちに挨拶をする西井の背中を見ていた。

そう、あれは子供頃の話だ。

なにも気にする必要はないのだと頭では分かっているが、茨城県産純情乙女だけに感情がそれに付いていかない。

落着けと呪文のように口の中でブツブツと唱え続ける時に、不意打ちのように突然話しかけられ、ビクッと身体が跳ねた。

「笠原もよろしくな」

「え、あ、よ、よろしく」

何とか繕って返事を返すが、動揺していますというオーラがありあ

りだ。

だが、正面から垣間見た西井の姿は郁の記憶の中で知る姿とは違っていて、それが過去なのだという事を自覚させてくれた。幾分、それで冷静さを取り戻せた。

「中学振りだね」

「ホント、久しぶりだな…笠原は変わってない」

「変わってないってどんだけだよ」

手塚のツツコミが拍車をかけて冷静にさせてくれる。

郁はいつもの様に噛み付いた。

「失礼ね！表に出ろ、手塚！」

「阿呆、いきなり勝負を挑むな」

ガルルと唸りだしそうな郁の頭に堂上の手が乗る。それがストップパ
ーの役目を果たし、釣り上がっていた眉を下げた。

さすが、猛獣使い堂上である。

「酷いと思いませんか！私だって昔から比べると変わりました！」

小牧もクスクス笑いながら話に入ってきた。

「笠原さんはキレイになったもんね、はーんちょ」

「知るか！」

小牧のからかいに反射で答えた堂上に郁がプウと口を膨らます。

「それ、酷いー！自覚しろって言ったの教官じゃないですか！」

「っバ！今それを言うか！」

「はいはい、イチヤつくのは終業してからにしてね、西井が困
てるよ」

「最初に言い出したのはお前だろーが！」

「それ言うなら最初は西井だよ、ね」

と、小牧が西井に笑顔を向けた。

向けられた西井は、今までのやりとりで判断した事を口に出した。

「あの、もしかして、堂上一生と笠原は？」

「そ、この人たち、交際を通り越して婚約しちゃってる仲ってわけ」
婚約、その言葉で郁の顔が赤く染まる。

顔を伏して堂上の袖を掴む仕草が可愛らしい。

堂上は、郁のそんな行動に照れが生じるが、それを咎める気はないらしい。

ゴホンと咳払いをすると、この話は終わりだと話題を変えた。

いつものように堂上から呼び出しが掛かったのは、21時を少し回った頃だった。

図書基地内での小さなデートは、今や郁と堂上にとって当たり前のような日常となっている。

欠けた月明かりを頼りに進む薄暗い道。

安全対策のために植えられている木々は恋人達の逢瀬のためにあるわけではないのだが、何かとイチャつく場所に不自由な寮住まいの隊員たちにとっては便利な所なのだ。

堂上は本日も、郁を木陰に隠して、その唇の甘さを味わっていた。

「ん・・・」

息継ぎのたびに漏れる郁の声に煽られ、堂上の舌が激しい動きを見せる。

何度も交わしているはずなのに、唇を離れた時には力が抜けてしまっていて、郁の肢体は堂上へと縋り付かなければ立っていられない。「篤さ…ん・・・」

キスを終えた後、堂上と瞳を合わせるのが未だ恥ずかしく、堂上の肩に頭を押し付けて羞恥が去るのを待つのも変わらない。

「ん？」

「何か怒ってます？」

恐る恐る上げた顔は堂上の感情を必死に読み取ろうとしている。

「どうして、そんな事を言う？」

「だって…」

郁は堂上から身体を放して、そっと手を伸ばし堂上の眉間に触れた。

「ここずっと、皺がよつてる」

私、また何かしましたか？と小首を傾げる姿は、叱られるのを怯える子供のように頼りない。

堂上は眉間に触れる郁の手を軽く掴んで下ろさせた。

そして、郁の額に額を押し付けて瞳を合わせる。

「怒ってない」

「ホント？」

「ああ。・・・何か、お前、俺に怒られるような事でもしたのか？」

「え！してない！！」

「本当か？そういやー、お前、西井を見た時に不自然にうるたえていたよな、何でだ？」

候補生として現れた西井誠の存在が気になっていた。

あの郁の態度を見て気にならないわけではない。

そのことがずっと頭にあつたのだろうが、堂上としては眉間の皺は無意識に出来ていたものだ。

だが、郁に指摘されたのを良い事に、さり気なさを装って郁に西井の事を聞く事が叶った。

普通に聞いてしまえば良いものを。堂上は郁からもたらされる最悪な答えを想像して、こんな事がないと聞くキツカケが掴めなかった。つていうのもあつた。

聞かれた郁は、うーと唸り声を上げながら、なにやら思案顔をしている。

あつちこつちへと視線をさ迷せた後、一度顔を伏せググツと歯を食いしばり、徐に強い眼差しで堂上をキツと射た。

「軽蔑しないでくれますか！！」

「アハハハハッ！もう、笠原サイコーね」

話を聞いた柴崎は笑い過ぎで浮かんでくる涙を拭った。

止まらない笑い声に郁のはテーブルに突っ伏して瞳だけで柴崎を睨み付ける。

「お前、昔からそうなのな」

手塚も呆れたように向かえ側に座る郁の旋毛くるもを見やる。

「うるーさーいー」

「そうだろ。いくらガキの頃でも女だろ、お前。ホントに信じらんねえって」

「あの時はツツ！！タイミングが悪かったって言うか！」

「タイミングって…そのタイミングでドロップキックを食らった西井くんの身になりなさいよ」

シレっと言い放つ柴崎に郁はウガアと唸って敗北を認めた。

その様子をニコニコと笑いながら、郁の隣に腰掛けていた西井が待ったをかける。

「まあ、あの時は俺が全面的に非があつたわけだし」

「それでも、背後からの全力ドロップキックはありえんだろっ」

「ホーント、あんたの得意技だつて事が分かつたわ」

「そういや、堂上一正にもかました事があつたよな」

「わわ！その過去は抹消して！」

郁は両手をバタバタと振り回し空気を切った。

新人隊員の頃の自分の無知さ加減は今や穴を掘って埋めてしまいたい程の痛い思い出だ。

郁たちは今、同期組でよく呑みに行く居酒屋にいた。

なぜ郁や柴崎、手塚に加え、西井までもいるかと言うと、研修が始まって3日目の今日、柴崎に誘われる形で同期同士の親睦会を兼ねた飲みに繰り出しているからだ。

最も、その目的は頑なに何かを隠したがっている郁を締め上げるための柴崎の企みだったわけだが。

「俺、堂上一正にドロップキックかましたところを見て、あの時は笠原とは相成れないと思ったぞ」

だから、今が不思議でならん、と真面目に答える手塚に柴崎がこれでもか！というような高笑いをした。

「や、ヤバい…苦しい…そ、それで、笠原あんた堂上教官にはこの事言ったわけ？」

「言いましたとも！」

「反応はどうだったのよ」

郁はあの日の堂上とのやり取りを思い出し、ああ〜と力無く額をテールブルに打ち付けた。

郁の話を聞き終えた堂上は我慢の限界よろしくブツと吹いた。

それでも笑いを耐えようとした結果、ヒクヒクと口元がひくついてしまっている。

「だから、言いたくなかったのに〜」

その堂上の表情から軽蔑の色が見られない事に安堵するものの今度は羞恥に襲われいたたまれない。

「お前…それはないだろ…」

小刻みに震える肩に縋り付き郁は、過去の思い出に思いを馳せた。

中2、夏。

身長をダシに振られて1週間、郁の乙女心は未だ癒されていなかった。

振られた相手と同じクラスなのも原因の1つなのだろう。

郁は昼休みになると、その傷心を癒すために、以前先輩から教えて貰った本を読むのに最適な木陰へ通っていた。

今日も給食を食べ終わると、我慢の足で図書館へ足早く移動する。新刊コーナーを物色して、ずっと読みたかった本を見付けた。

ほくほく気分ですれを借りる。

そして、すぐ図書館から出ると今度は階段を下りる。すると校舎内に中庭が見えてくるのだが、そのベンチには瞳もくれず早足で進んで行く。

校舎の裏手の庭のもつと奥が郁の目的地だった。

早く読みたいと急かす気持ちだが、足を速ませたが校舎裏に入ろうとした時、人の話し声を聞いて足を止めた。

「私、西井くんが好きです」

ヤバイ！郁は瞬間的にそう判断した。

秘密の中庭には、この道を通らなければいけない。

だが、他人の告白を聞いて良いわけじゃない。自分がされたら傷付く。

郁は来た道に戻ろうとした。

その時だ、告白されただろう男からの言葉が耳に直撃したのは。

「俺は君を絶対に好きにはならないよ…もし万が一にも付き合っても長くは続かない」

冷静な言葉。

郁が告白した時でも、された男の子からは焦りみたいなものが感じられたのに、この声の主からは感じられない。

1つ1つの単語に好意がないと感じられる程に冷静で静かな返事だった。

「それでも好きなの…」

語尾が震える声。泣き声だ。

恥ずかしいのだろう。

傷付いているのだろう。

啜り泣く声が痛々しい。

「君の一方的な好意なんて迷惑だ」

だが、無情にも返って来た言葉は郁の心にも突き刺さった。

酷い、そう思ったが最後、郁は後先考えずに、その場に飛び出し全力疾走でその無情男にドロップキックをかましていた。

油断していた背後からのドロップキックは堂上にかましたものより数倍威力があり、西井少年は顔面からガガガと地面に流れる形になった。

驚愕の衝撃から何事かと振り返った顔には額、鼻、唇に至るまで擦り傷が出来ている。

告白した女の子も口を押さえてボーゼンとしている事しか出来ない。西井少年と瞳が合った郁は、グウと息を吸い込んだ。

「断るにしても言い方っていうものがあるだろーがッッ！あんたがもし好きな人から同じように言われたらどういう気持ちになんのかなよ！」

好きな人に振られて1週間、笠原郁傷心中。

その声は涙声だった。

「笑いを我慢しようとして引き攣ってた」

チビチビとグラスのお酒を呑みながら、堂上に過去の告白した経緯を話した。

「優しいわね、彼氏は…あ、もうフィアンセか」

「黙れ柴崎！」

柴崎は尚もカラカラ笑い郁を沈める。

「もうね、笑いを堪えようとしてくれるのは分かるんだけど、あそこまで小刻みに震えられるといたたまれない」

いつそのこと爆笑された方がよかった、と郁は天井を仰いだ。

「本当に笠原は堂上一正に大切にされてるな」

「そうよー、あの王子様は笠原が大切に大切に食べちゃいたいくらい大切にしてたんだから」

「なんだそれは！」

「俺でもお前を大切にしてるの分かるぞ」

朴念仁の手塚にまで言われ郁は顔が赤くなるのが分かる。

堂上はいつでも郁に対し、真摯で優しい。

「そうなんだー、そりや残念だな」

「は？」

コクリとグラスを煽った西井は怪訝な顔をした3人に涼やかな笑顔を向けた。

「俺の初恋って笠原だからさ。あの時の笠原の言葉があったから人には真摯にしようと思えたし…そう考えると残念だなんて思ってた」

君の思い出 ポクの嫉妬（後書き）

これより先、書いていません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1178v/>

図書館戦争・短編集

2011年7月25日01時09分発行